
妖都捕物帳

藤藤キ八チ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖都捕物帳

【Nコード】

N0307V

【作者名】

藤藤キ八チ

【あらすじ】

あやかしの暮らす街に住んでいる六花は、他人の妖気を吸い取り、浄化させることで病を癒すという不思議な力を持っている。この力を役立てたい六花だが、連れ合いの影虎は力を使うことにいい顔をしていない。そんな中、六花の噂を聞きつけた行者が現れて……。江戸風味ファンタジー。

さやけし玉の緒（1）

二つの足音があつた。

先を若者が、そして後に老婆が続いている。二人は急ぎ足で闇に包まれた街中を進んでいた。墨を流したような夜空に浮かんでいるのは三日月で、街に降り注ぐ光は弱々しい。提灯すら下げていないが、幸いに二人とも夜目が利くので足下は確かだった。

丸くなつた背中の子で老婆の背丈は小さく見える。若者の胸にも届かない。およそ歩幅は広いとは思えないが、若者の脚についていつているところを見ると、老婆こそ健脚だ。

彼女は産婆だ。先に行く若者の妻が産気づいたと報せが入り、長屋まで急いでいるところだった。お産は昼も夜も関係ない。呼ばれたとあれば駆け付けるのが産婆だ。

すでにとつぷりと日は暮れ、ひとけ人氣はない。

「婆さん、もうすぐだ」

若者は老婆を振り返る。老婆は頷きかけ、そしてあつと声を上げた。

前方の、若者のさらに向こうを何か横切つた。若者も気配で気付いたのか、ゆるゆると足を止めた。

三日月の弱々しい明かりの下に、闇が蠢いた。

おおだな大店の並ぶ通りは日のあるうちには人も行き交い、大八車も通るほど道幅は広い。こんもりと盛り上がった闇は、その広い通りを通せんばするように立ちはだかつていた。

ぞろり、と闇が動き、滑るように現れた暗褐色の双眸が二人を見止めた。

「ひっ」

若者は顔を引きつらせて下がった。背筋を氷で撫でられたかのように全身の肌が粟立つ。逃げなければと本能が警告するが、背中を見せればその一瞬に殺されるだろう。

これはただそこに在るだけではない。殺そうとしている。身じろぎを封じられた二人に闇がまさに跳びかからんとしたその一瞬、白い光が大店の屋根を飛び越えて、闇に躍りかかった。流星のように現れた白い光は山犬の姿をしていた。しかし、闇に對して山犬はあまりにも小さすぎるように感じた。

闇の半分にも満たない体躯で、果敢にも山犬はあぎとを開いた。闇は膨れ上がり、同じようにあぎとを開いた。力と力がぶつかり合い、バチンと電光が弾けたような音が響いた。白と黒が位置を変え、組み敷き組み敷かれ、目まぐるしく状況は変わる。

劣勢に陥った山犬は闇にのしかかられ唸り声を上げた。力で制した闇はおよそ獣とは思えぬ咆哮を上げる。闇が山犬に覆いかぶさったのと、山犬が身を転じて喰いかかったのはほぼ同時だった。

ズンと腹に響く重い音がして、若者と老婆はひっくり返った。下から地面が叩かれたような衝撃だった。ひっくり返った二人の上を一拍置いて生温かい風が吹き去ってゆく。

「うっ…」

若者は背中をしたたか打って呻いた。生温かい風に乗って血生臭いにおいが体にまとわりついてゆく。反射的に息を止めたとき、シヤン、とかすかに金属が触れ合う音を聞いた気がした。

死臭が漂っている。

常に酸っぱいような、ものが腐った腐臭がしていた。

打ち捨てられた長屋の壁には穴が開いており、戸を閉めても風雨は防げない。それでも屋根があるだけでした。その屋根も傾き、雑草が芽を出している。薄茶けた景色の中で草の緑だけが鮮烈だ。

壁にもたれて膝を抱えているのはまだ十にも満たない子供だ。痩せ細り、骨と皮だけの子供は垢で汚れて煤けた木偶のようだった。

六花りっかの視線を感じたのか、子供は顔を上げた。

「あめ」

乾いてひび割れた唇が動いた。初めてここを訪れたとき、憐れみで飴をやったのがそもその間違いだった。

六花はしゃがみ込むと、懐から小指の先ほどの大きさの飴を取り出した。

「あーんしてごらん」

「あーん」

子供は口をいっぱいに開けた。口の中に入れてやると、子供が飴のとろけるような甘さに顔をほころばせる。

この子はきつと他に何も口にしていない。口に出来るようなものはこのあたりには何もなかった。あつたとしても木の根が、草ぐらいのものだろう。身なりのきちんとしている六花が食べ物目当ての輩に襲われないのは、みな人を襲う気力がないからだ。

ここにいるのは病んでいる者か、死体ばかりだ。

こけた頬を六花は指で撫でた。

「おいしい？」

子供は小さく頷いた。六花はあどけない顔を前にして、思わず泣きそうになった。慌てて立ち上がると子供の小さな声が追いかけてくる。

「ありがとう」

六花は逃げるようにして立ち去った。あの子供は近いうちに死ぬだろう。それだけははっきりとわかった。頬に触れて感じたのは、あるかなしかの妖気だった。

体内を巡る妖気がひどく弱々しい。ここ数日で急激に減っているその理由は、命が残り少ないからに他ならない。

憐れだった。お腹が空いたと言いなから、あの子は死んでいくのだろうか。

目をつぶって、耳を塞いでしまったかった。ここは捨てられた者たちの怨嗟の音が強すぎる。今にも背を向けて逃げ出してしまったくなる。

熱い目頭を袂でぐいぐいと拭って、六花は立てつけの悪くなった

戸を叩いた。

「旦那さん、六花です。入りますよ」

滑りの悪い戸をなんとか開けると、くたびれた風の男が六花を出迎えた。

「ああ、六花さん。お待ちしておりました。いつも申し訳ない……

おや、目が赤いですね」

「ちよつと……、砂が入りまして」

「砂埃がひどいですからね」

合点がいったように男は頷いた。

「わたしらはまだ戸があるだけましですわ。戸のないところはむしろがあればいい方です。いやいや余計な話をしましたね。御足労いただいてお茶も出せずに申し訳ないが、早速お願いできますか」

九尺二間の奥の方にはつきはぎだらけの布団が敷いてある。横たわっているのは男の妻だった。白い顔には生気がなく、薄いまぶたはきつく閉じられたままだ。確かに布団に入っているのに、布団には厚みがない。男もくたびれていれば、女も同様にやつれていた。

六花は横たわっている女の側へ寄る。造作は決して悪くはない。起きて動いていた頃はさぞかし美しかったであろうことが垣間見ることができた。詳しくは知らないが、遊女であったと聞いていた。

手に手を取って逃げ出したが、しばらくして女は病に倒れた。二人には医者に診てもらえるような金もなく、落ち伸びた先で女の容体は悪くなるばかり。とうとう枕から頭が上がりなくなり、意識も虚ろになったとき、男は偶然に六花の話聞き、藁にも縋る思いで頼ってきたのだった。

六花は女のそげた頬を両の手で挟んだ。六花の指も冷たいと言われるけれど、女の頬はそれ以上にひどく冷え切っていた。

女の額に自分のそれをくつつける。まぶたを閉じて深く息を吸うと、女に意識を集中させた。

体を巡る妖気は細い糸がゆるゆると流れているように感じるだけでほとんど残っていない。灰の奥の埋^{うず}み火のように体内に残ってい

る妖気を見つけ出し、六花はそれをゆっくりと吸い込んだ。

流れ込んできた妖気は女の体と同じく冷え冷えとしていた。それが六花の熱くなった胸のあたりに滑り込むと、ほんの僅かに温もりを取り戻す。

温かくなった妖気を女に戻してやると、六花は顔を上げた。紙のように白かった女の頬は、かすかながら血色を取り戻していた。

傍らで固唾を呑んで見守っていた男は、喜色を浮かべて女の痩せ細った手を取った。

「藤江、ああ、顔色が少し良くなった！ 六花さん、ありがとうございます」「
ざいます」

「いいえ。お礼を言われるほどのことはしていません。わたしはただ、妖気を巡らせただけ」

男は首を振って眩しそうに六花を見た。

「いいえ…、いいえ！ 何も食べられず、痩せていくばかり。もうどうしようもないと思っていたのに、六花さんが術を施してくれてからは顔色が良くなってきているんです。きっと藤江はよくなる。また、以前のようにしゃべってくれる」

男は愛おしそうに女を見つめると、その手を撫でた。女の唇はひび割れてかさついている。例え良くなったとしても、言葉を発するようになるまではまだまだ時間がかかるだろう。

「こんなによくしていただいたのに、なにもお返しできず申し訳ないです」

はたと我に返った男は深々と六花に頭を下げた。最初に銭は受け取らないと言ったのは六花だ。やめてくださいと言って六花は男の肩に手を添えた。

「また、明日に來ます」

「ありがとうございます。お気をつけて」

見送ってくれた男に一礼して、六花はその場を後にした。

さやけし玉の緒(2)

閑散とした長屋から離れ、人の姿をちらほら見つけ出すと、ようやく六花はほっと胸をなでおろした。小ぢんまりとしたお店たなが並ぶ中通りを抜けると、大店が並ぶ表通りに出た。活気のいい掛け声や人いきれが六花を包む。

真つ直ぐに伸びる川には、船頭が荷を積んだ船をゆっくりと操っている。川の流れは今日も緩やかだ。川縁にはしゃらしゃらと音を立てて枝を垂れる柳が風に吹かれてなびいていた。

もうすぐ夕餉の支度の時間だ。

いつも決まった時刻にやってくる棒手ほてい振りから何を仕入れようかと考えながら、足は長屋ではない方向へ向かう。

橋を渡って人波をかき分けて少しばかり歩くと、南町奉行所が見えてきた。広い間口から六花はぴよんと跳び込んだ。

「こんにちは！」

知った顔が六花の姿を見止めて柔らかく笑った。

「やあ、りつちゃん。いらっしやい。でも残念だね、影虎は出てるよ」

「忙しいの？」

白碩はくせきは首をかたむけた。

「いつも人手不足」

そうねえと六花は納得してあさつての方向を見た。南町奉行所に出入りしているのは与力の源九郎を筆頭に同心の白碩はくせき、黒碩くくせき、そして六花の連れ合いの影虎だ。その他は同心たちの手下てかぐらいで、奉行所内が人で賑わっていることは稀だ。

「まあ、特に今は出払ってるから。一人は居残ってないとね」

留守番を預かっている白碩の含みのある言い方に六花は顔を曇らせた。

「まだ捕まってないの？」

数日前から町人が獣に噛み殺される事件が続いていた。殺された死体に残されていたのは刀傷ではなく、噛み裂かれた痕に似ていた。食い散らかしたようにも見えるため、下手人は獣だろうという見解である。

しかし、今一つ解せないこともある。いたずらに殺しを楽しんでいるような部分もあり、完全に獣の仕業にするには腑に落ちない。飢えた獣の仕業ならば喰い散らかすのはおかしいし、腹が満たされればしばらくは身を潜めるはずである。

連続して殺しを楽しんでいることから、人の意思を持つ獣の姿をした者が、もしくは獣を使って何者かが町人を襲わせているという結論に至った。

そして今朝方、新たな情報が入った。

六花の隣に住む若夫婦の旦那と、旦那が呼びに行つた産婆が、昨夜、怪しげな獣を見たというのだ。

ただ、獣であろう物体が墨のように真っ黒だったため、はっきりとした形は掴めなかった。しかしそれが二人に襲いかかろうとしたとき、白い山犬に似た獣も踊り出てきたという。

二人を尻目に激しくもみ合つた獣たちだったが、不思議なことに唐突に消えてしまった。とてつもない衝撃が襲つてきたので、もしかしたら倒れ込んだその隙に身を潜めたのかもしれないが、それも気を失ってしまったのではっきりと覚えていないということだった。「その白いのも人殺したのかな」

「どうして」

まるで山犬に似た獣は人を殺さないとも言つようだった六花の言葉に、白碩は尋ねた。六花は眉をひそめ、上に下に視線を泳がせるとうつむいた。

「だって、白いので悪いのいないよ。白ちゃん、いい人だもの」

ぶほつと白碩は思わず吹き出した。確かに白碩の髪は白い。碁石の付喪神である彼には、もちろん黒碩という髪黒い相方がいる。六花の定義でいくと黒碩は悪者になる。

「じゃあさ、黒はどうなの。りつちゃんにとって悪者？」

くくく、と喉で笑って白碩は聞いた。六花は間髪置かず頷いた。

「黒ちゃんあんまり好きじゃない」

嫌われたものだな、と白碩は心の中で嘆息した。

「でも、それを言ったら影虎だつて悪い部類に入るんじゃない？」

「誰が悪いって」

不機嫌そうに入ってきたのは影虎本人だった。黒髪を一つに括っている影虎は目を眇めて白碩を見やった。上背があるので睨みをきかせるとかなり迫力がある。その圧力をさらりと受け流した白碩はお帰りとにこやかに言った。

「虎ちゃん！」

ぱつと顔を輝かせた六花は影虎に抱きついた。体当たりにも等しい勢いだったが、六花ほどの小作りな少女の目一杯はたかが知れている。影虎には軽く、抱きつかれたまま六花を引きずって数歩進む。

「邪魔だ」

「きゃんっ」

頭突きを受けて六花は子犬のような声を上げた。

額を押さえた六花を置いてけ堀にした影虎は、草鞋を脱ぐとのんびりと座ったままの白碩の横を大股に通り過ぎる。白碩は背中に声をかけた。

「なにか収穫は？」

「掏摸すりを捕まえた」

「他は」

「ない」

短く答え、戸棚から桐箱を取り出した影虎は苛立たしげに「ああ」と声を漏らした。

「符がねえな」

影虎は基本的に符術を用いて捕物をする。己の妖気を込めるため、一時に大量いちどきに作るのは難しい。合間を縫って符の準備はしているが、たまたま切らしてしまったようだ。

そうとう掏摸に梃子摺ったのか、そうでなければ手持ちの符を使い切るはずもない。

珍しいこともあるものだと思いますながら白碩はその様子を眺める。

「虎ちゃん、疲れてる」

突然上がった声に、白碩は隣で身を乗り出している六花を見た。

六花は触れた相手の妖気がどんな状態なのか感ずることが出来る。

そして、弱った妖気を体内に取り込み、浄化し、また相手へ戻すことにより、病を癒すこともできるという。

草鞋を脱ぎ捨てて上がった六花は、怪訝そうな顔をした影虎に近寄った。

「大丈夫？」

硬く握り締めた手に六花が指を伸ばすが、影虎はその手を払いのける。驚いて何度かまたたいた六花に影虎は低く聞いた。

「余計なことすんな。おめえ、今日どこ行ってた」

「え」

「どこ行ってた」

どうして怒っているんだろうと六花は困惑し、口の中で「によ」によると答えた。

「向かいのお婆ちゃんのことか、いつもの店の坊ちゃんのこと」「あとは」

六花は口ごもった。複数を渡り歩いていることはとうに知られている。

最近になって六花が自分の持つ特殊な能力を役立てたいと言って、腰痛持ちの老婆を何気なく癒したのがきっかけだった。

不思議な術を用いて病を癒せる娘がいるとたちまちに噂になり、見る見るうちに六花は引つ張りだになった。先日などは、大店の跡取り息子だが体の弱いことで悩んでいる夫婦の元へ行ったと思つたら、謝礼だといって錦の反物を抱いて帰ってきた。

六花がほとほと困り果てた顔をしていたのは言うまでもない。

六花の力は一度で完全に回復させるものではない。定期的に妖気

の浄化と循環を行わなければ、すぐに元の状態に戻ってしまう。
幾つ通いの場所があるのか、指折り数えても両手では足りないほどだ。

ねめつけてくる影虎の顔を真正面から見ることができなくて、六花は視線をそらした。

「西の端っこの、長屋とか」

影虎の顔が険しくなる。

「あの辺りには近づくな」

「でも、でもね……」

「疫病でももらっても、俺あ知らねえぞ」

「でも虎ちゃん」

桐箱を戸棚に仕舞い込み、符のないままもう一度外へ出ていこうとした影虎に追い縋る。腰に佩いた太刀の感触を確かめた影虎の手に触れようとすると、やはりぱしんと弾かれた。

「余計なことすんじゃねえ、おめえはじっとしてりゃいいんだ。さつさと帰れ」

しゅんとうなだれる六花を置いて、影虎は奉行所を出て行ってしまふ。行き違いに白碩の相方、黒碩が戻ってきて、ぶつかりそうになつた影虎の顔を見て奇妙な叫び声を上げた。

「なにあいつ機嫌わるうー」

「お帰り黒」

やはり白碩はにこやかに微笑みながら手を上げて出迎えた。黒碩は白碩の隣で肩を落としている六花の姿に気付いた。

「おお。何だ、りの字いたのか。わかった！ 喧嘩でもしやがったな？」

「喧嘩と違う」

手で顔を覆った。

「どうして？ どうしよう。虎ちゃんのことと思って言ったのに、怒らせた」

震えてくぐもった声が手の下から漏れ出た。白碩が六花の頭を引

き寄せて撫でた。されるがままにもたれた六花はぐずぐずと涙をすすする。

影虎よりも、六花の方が疲れている。六花の力はひどく彼女を疲弊させる。それでも影虎が疲れていることを知れば、六花は浄化の力を使わずにはおれない。

結果的には疲労を悟られてしまったが、影虎は自分の疲労を自覚していたからあえて必要以上に触らせなかったのだ。

(しかし、何も叩かなくても)

白碩は六花の頭を撫でながら短く息を吐いた。

影虎は言い方がきつい。前はもつとまともだった。まだ思いやりの欠片が見えた。影虎が同心になりたての頃、六花が事件に巻き込まれることを嫌って、奉行所に来るなど言っていたのを見たことがある。

『家帰って、待ってる』

そう言っ六花の頭を撫でた影虎の横顔が、そのときばかりは柔らかに見えた。

六花が力を多用するようになってから接し方が明らかに変わったのは確かだ。

心配はしているけれど、それを口に出れない不器用な男だ。結局、突き放すような口調になってしまう。

困ったものだ和白碩は思案した。

「よしよし。影虎はあれでもりっちゃんの身を案じてるんだよ。わかりにくいけどわかっておあげ」

「わからない」

「うん、まあちよつと無理言ったね」

「虎ちゃんはほんとうは優しいの。でも力を使うなって言うの、わからない。わたしが人を癒すのは、虎ちゃん嫌なの？ 疲れてる虎ちゃんは、わたしに癒されるのは嫌なの？」

ぼつぽつとこぼす六花は言葉に、おや和白碩はまたいた。影虎の本意の一番重要な部分が伝わっていない。

まあ本人が口にしていないのだから致し方あるまい。外野から教えるのも筋近いな気がして白碩は押し黙った。

黒碩はしょんぼりしている六花の額に頭突きした。ゴツと小気味よい音がする。六花が妖気を循環させるときには必ず額をくっつけることを知っている黒碩はニヤリと笑った。

「くだらねーことで悩んでんなー。まあいいからちよつと俺の妖気でも癒してくれや」

「……黒ちゃんいつも元気だね」
「そうだろう」

自慢げに胸をそらす。落ち付いた物腰の白碩と逆に、黒碩はただ座っているだけというのが出来ない。不思議なもので、彼らの持つ妖気の質も全く逆だ。白碩が静だとすると黒碩は動である。

性格が妖気の質を左右するのか、または妖気の質が性格を作り出すのかは六花にはわからないが、不思議な共通点がそこにある。

隣にいて楽なのは、常に落ち付いた妖気の波を持つ白碩だった。黒碩は妖気の波 変動と言ってもいい が大きいので、側にいるとどうにも落ち付かなかつた。

六花は白碩から離れて立ち上がった。

「ありがとう、白ちゃん。わたし帰るね。夕餉の支度しなきゃ」

「おいおい俺には感謝の一つもなしかよ」

「黒ちゃんには何もしてもらってない」

可愛げねえなと舌打ちをした。白碩が立ち上がり、黒碩がどつかと腰を下ろす。

「りっちゃん、送っていくよ。一人じゃ危ないからね」

どうやら居残りの交代だったようで、白碩は留守を相方に頼むと六花を伴って奉行所を後にした。

さやけし玉の緒(3)

影虎は行き先もなしに人込みを器用にすり抜けた。普段は気にとめない棒手振りの上げる声や、荷車を引く音、急ぎ足が砂利を踏み締める細かな音が積み重なって響く喧騒が、今はひどく耳障りだった。

苛立ちを隠せず、帯刀した刀の柄を指でなぞる。

疲労は自覚していた。掏摸ごときで持ち符を使いすぎたのがその証拠だ。複数犯だということにも気付かなかつたのだから、だいぶ勘が鈍っている。

目を細めると、眉間に皺が寄った。使い慣れた柄を握り締める。表通りを避けて、小道に滑り込んだ。こぢんまりしたお店が並び、お店の前では子供がきゃっきゃと楽しそうな声を上げて走り回っている。

影虎に気付いた子供がはたと動きを止めた。硬直したと思ったら、火のついたように泣き始めた。

影虎は思わず息をついて眉間を押さえた。子供に泣かれるのは今に始まったことではない。とにかく目つきが悪いらしい。その上、体格が良いので大人でも目が合うと強張る者が多い。

それでも六花が隣にいれば子供が泣いてもあやしてくれるが、一人のときは余計なことをしても火に油を注ぐだけだ。

やれどうするかと考えていると、泣き声を聞きつけたお内儀かみが慌てて見世みせから出てきた。若お内儀なのか年若い。やはり影虎を見てぎよっとしたが、母親らしく毅然として影虎をにらんだ。

「ちよいとお兄さん、うちの子になにしたんだい」

「なんもしちやいねえよ」

「なんもしちやいなくて泣くものか」

足にすがりついてきた子供の背中をさすりながら、お内儀は果敢に斜に構えた影虎をねめつける。

「どこの誰だか知らねえが、うちの子泣かしてただで済むと思っ
んのかい？ え？」

勝手に泣き始めたのは子供の方だ。一体どうしろというのか。も
ういっそのこと、手拭いでほっかむりでもして歩き回ってやるうか
と思っただ。

何をしたんだと言われるのは何度目だか、もう覚えてもいない。
歩けば子供が泣き、大人にはくだらない因縁をつけられる。まとも
に相手をするのが七面倒になって後ろ頸に手をやった。

「ちよつとあんた聞いてんのかい」

お内儀が声を上げると、小道の先に視線をやっていた影虎はしつ
と短く言っただけで目で制した。鋭い視線を向けられたお内儀は震えて押
し黙ったが、影虎の意識はとうに小道の先へ集中している。

何かがある。何とははつきり断定できないけれど、この先に何か
がある。

こういうときの勘は良く当たる。特に、嫌な勘ほどの中する。

「しばらく出てくるんじゃないぞ」

視線を外さないまま言い捨てると、影虎は静かに歩を進めた。

懐へ手を突っ込んで符を確認した。そうして数えるほどしか残っ
ていないのだということを出す。こうなると、いざというとき
しか符は使えない。

代わりに、腰に佩いた二振りの刀の鞘を指でつとなぞった。柄を
握る。使い慣れた感触がそこにあった。

何かに近づくにつれて、松明でも突きつけられているようにうな
じがひりひりした。

小道の先には柳が見え、突き当たりは河岸だと知れた。影虎はそ
こそこ広い通りに飛び出した。

赤毛が目をついた。こちらに背を向けている赤毛の男は、眼下に
流れる河を覗き込んで何事かを話していた。答える声が河岸から上
がってくる。船頭でもいるのだろう。

男はひらひらと手を振ると気だるげに踵を返した。目が合い、影

虎の視線が真つ直ぐに自分に向けられていると知って、一瞬いぶかしげな顔をした。

良く日に焼けた肌に赤毛が映える。着物に包まれた体軀はすらり見えるが、決してひ弱なわけではない。むしろ鍛えられて無駄な肉がないと言った方が正しい。

整った顔立ちをしており、柔らかく微笑めば女が好みそうだった。向かって左の眉尻に傷があり、男の雰囲気はどこかしら野性を加えていた。

「見ねえ顔だな」

影虎が口を開くと、男はいつそう眉根を寄せ、怪訝そうな顔をして影虎を見返した。視線が動き、腰に佩いた太刀を見止める。影虎の左手が柄に触れたまま離れないことで、男は斜に構えた。

男はこれといって得物を持っている様子もない。遠くから感じた得体の知れない雰囲気も、男を目の前にした途端に薄らいでしまった。

この男ではなかったのだろうかとも思ったが、妙に肝が据わっているところが気になった。

「おめえ、外から来たのか」

「……この街には数日前に入った」

「目的は」

明らかに行商ではない上に、旅人にしては不慣れな様子だ。旅を始めたばかりだと言えば不思議ではないかもしれないが、どうにもそうは思えない。

男は初めて不快感を面に出した。

「聞いてどうする」

「答えられねえか。じゃあ、大番屋まで付き合ってもらおうか」

改めさせてもらおうか。そう言われたことで、男はじりつと後ずさった。その行動が影虎を動かさせた。

口答えをするならば、まだ猶予はあった。多少なりとも探られたくないことがある者は、だいたい口が出るし、視線が泳ぐ。男は口

ごもるどころか間髪入れず逃げようとした。問答するほど余裕がないのだ。

瞬時に逃走を選んだことで、召捕ることが決定する。

影虎は刀に手をやり、大腿に一步を踏み出した。男との距離は歩幅にして約五歩。それを三步で縮め、鯉口を切った。

男は顔を硬直させた。胸の辺りがすっぱりと真一文字に斬れていた。衣に血は滲んでいなかったが、皮一枚は切れている。

影虎の手に握られているのは脇差だ。もし長い打刀うちがたなを抜いていれば皮一枚では済まなかった。男は青ざめ、薄く開いた唇から息を吸い込んで確かめるように胸に手をやった。

影虎はわずかに眉間を寄せた。

場馴れしていない。戦いの中に身を置いたことのある者ならば、素早く距離を取るはずだ。男はまだ間合いの中にいる。だが、どうしたことだろう。相手の間合いも量れない様子だが、身は軽い。浅い傷で済むほど手加減はしていなかった。戦うことに慣れていないのに動きに無駄がないという矛盾をいぶかしんだ。

どこかに得物を隠し持っているのかとも考えたのだが、構える仕草も見せない。

やはり何か剣呑さを感じたのはこの男ではなかったのかもしれない、そう頭の片隅で思ったとき、男の体が光った気がした。

どこが、というわけではない。頭の前から爪先まで、全身を包み込むようにして淡く発光した。

その瞬間、うなじがちりつと焼け付いた。咄嗟に影虎は左腕を前に構えた。と、ほぼ同時に鈍い痛みが腕を襲った。男の影から飛び出してきた獣が、影虎の腕に深々と牙を突き立てていた。

頭で考える前に体が反応した。刹那でも遅ければ首を噛み千切られていただろう。すつと氷でも撫でつけられたように背筋が冷えた。

唸り、唾液を口角から垂らしながら、白い獣は首を左右に振った。腕を食い千切ろうとしている。抗って全身に力を込めると、牙はさらに食い込み、火箸で衝かれているような痛みが走った。

白い山犬の四肢は太く、体軀は立派だ。白い毛並みは光を弾いて銀色に輝いている。

その辺りの山に潜んでいるものよりもゆうにふたまわりは大きい。男の横にも後ろにも獣の影など見当たらなかった。一体どこに潜んでいたというのか。

影虎は短く息を吸い込んで、山犬の腹に拳を叩き込む。一瞬早く飛び退いた山犬は大柄な体軀とは裏腹に、身軽に飛び退って距離を取る。

空を切った手に握った脇差を青眼に構えた。山犬は身を低くすると、歯をむき出して唸り声を上げる。

にらみ合いの視界の隅では、男がひらりと河岸へ身を躍らせたのが映った。ぎゃつと川面から船頭の短い悲鳴が上がる。幅広の河に浮かぶ屋根船を飛び渡り、男の姿はあつという間に向こう岸へ消えてしまった。

こうなつては追いかけるのはもはや不可能だった。目の前には迎撃態勢の獣もいる。影虎は内心で舌打ちをした。符を使おうにも向こうの動きが読めなければ、無駄に消費するだけだ。手持ちの符が残り少ない分、無駄に使いたくはなかった。

両者とも身じろぎもせずに出方を窺つてにらみ合う。と、唐突に山犬は後ろへ跳んだ。器用に空中で一回転すると、その姿は掻き消えてしまった。

あとには、深い山の中に漂うような、深緑と露の匂いが残された。手強い妖気を発していた割に呆気ない幕引きだった。半ば狐につままれたような感覚に陥った影虎はようよう脇差をおさめる。

肩の力を抜くと、途端に左腕がじんじんと痛んだ。まくりあげる。と袂の下から現れた籠手には牙の跡がくつきりと刻まれていた。籠手の下には守りの符が仕込んであるが、おかげで命拾いをした。なければ食い干切られていたところだった。

背側に手を回し、二つに折り畳んで締めている帯の間から細長い布を引っ張り出した。一方を咥え、肘の上に硬く巻き付けて血止め

する。

予想外にも街を騒がせている下手人と思しき人物にぶつかつた。若者と産婆が夜半よわに見かけた白い山犬とはあれのことだろう。現れたときも消えたときもまるで気配がなかつたので、山犬は実体でないことは明らかだつた。

影虎は男が消えた方向を見やり、踵を返した。

さやけし玉の緒(4)

行者が錫杖をつくたびに、先端の鑲かんが触れ合う音が夕空に高らかに響く。

屋根に雑草がはびこっている傾きかけた長屋の足下に、痩せた子供がうずくまっていた。行者は立ち止まり、ちらと涼しげな視線を送った。皮と骨ばかりの子供はぴくりとも身じろがない。

そのまま行者は歩を進める。

打ち捨てられた長屋には、死臭が漂っていた。

息をしている者も冬枯れの木の葉のようにカサカサとわずかに動くだけで、人の生氣というものが感じられない。

傾いていびつな戸を叩く。しばらくすると、戸は軋んだ音を立てて開いた。中から顔を覗かせたやつれた男は、珍しいものを見るような目で行者を見た。

「このようなところに、行者様が何用でしょうか」

「一晩宿を乞いたいのだ」

若い声が答えた。まだ山で修業をしてもおかしくはない年頃に見えるが、奇妙に落ち着き払った様子があり、見た目から推し量る年齢とちぐはぐな気がした。

男は戸惑いながら周囲を視線でぐるりと見回した。

「見ての通り、捨てられた者たちが集まった場所でございます。大したおもてなしはできませんし、奥では病を得た女房が寝ております」

「病と。それを聞いては尚更放つてはおけぬ。どれ、わしにできることはあるだろうか」

「あ、いいえ…、医者には診せていないのですが、うつるようなものではないです。ただ、日に日にやつれてゆく次第で。今では意識もあつたりなかつたりで」

男は足をすすぐ水を瓶から汲み上げた。行者は手拭いで足を拭う

と薄暗い長屋に上がり込んだ。油がないため穴の開いた行灯も隅に置かれたままだ。夕餉は終えたのか、かすかに青臭さの混じった煮炊きの香りが残っていた。

錫杖を立て掛けた行者が布団に横たわっている女の側へ腰を落とすと、男はわずかに声を弾ませた。

「今日は、まだ顔色がいいんですよ。術を施していただけまして」「術」

行者の目に興味深げな色が浮かんだ。

「ええ。妖気を循環させるとかなんとかで、どんな病でもたちどころに回復するとか。医者に診せることができずに悪くなる一方だった女房も、回復の兆しがありました。本当に感謝してもきれないです」

「ほう。その者、名はなんと」

「六花という、娘さんです。御存じないですか」

女の脈を測り、額に掌を当てていた行者は顔を上げた。

「わしは先達せんたうでこの街に着いたばかりでな。それにしても不思議な術もあるものだ。是非お目にかかりたいものだ」

どこか治して欲しいところでもあるのか、それともただ単純に興味があるのか、行者はわずかに目に光を宿して若者特有のすつと尖った顎を撫でた。

男は、六花は明日にまた来ると言っていたことを思い出した。

「行者様、その方でしたら、明日にまた来てくださると言っていました」

「おお、では、その者が来るまで間借りしておっても良いかな。一先ず今晚は隅にでも置いていただければ有難い」

どこからせつと言って立ち上がった行者の背中を見上げた。

「行者様、お若く見えますが、どこか悪いところでも？」

「うむ。ちよつとした好奇心だ」

振り返った行者は口角を上げて、人好きのする笑みを浮かべた。

事件が多いと影虎の帰りは遅い。夕餉を先に済ませてしまった六花は、早々に行灯の灯りを消してしまった。ずっと灯していても油が勿体ない。

仄暗い中でしばらく影虎の帰りを待つていたが、戻ってくる気配がなかったので、先に布団に潜り込んだ。それでも、影虎の足音でも聞こえやしないかと耳をすませていたが、聞こえてくるのは虫の音と、隣の赤ん坊の泣き声ばかりだった。

あーん、あーんと泣く声と、それをあやす母親の声が入り混じる。昨夜、産婆が街を騒がせている獣に襲われたせいで、赤子は六花や裏長屋の住民たちで取り上げた。

母子ともに何事もなく、健康で何よりだった。お産で亡くなる母親も赤子も多い。

ややこ、ややこ、と隣のお内儀が優しくささやく声にどこか安心して、六花の眠気を誘った。そうして丸くなると、六花の意識は暗闇に転げ落ちた。

しばらくしてふと目が覚めたのは、明るさをまぶた越しに感じ取ったせいかもしれない。糊付くまぶたを開けると、行灯のぼんやりとした灯りの中に広い背中が見えた。

「……とらちゃん」

振り返った影虎は、手にしていた筆を置いた。符を作っていたようだ。疲れているのに、それ以上に妖力を使ってしまって大丈夫なのだろうか、と六花は頭の片隅で思った。

「眩しいか」

「ん」

乾いた手が六花の頬を撫でた。温かくて気持ちいい。優しく撫でられ、もう一度眠りに落ちそうになったが、鼻にすうつと通る薬草の匂いを嗅ぎ取った。もしか、怪我をしたのではないだろうかと不安に駆られ、六花は影虎に意識を集中させた。

影虎の体内を巡る妖気はざらついていた。そそけ立ってざびざび

しているし、滞っているところもある。流れが滞っているところは怪我をしているところだったり、動きが鈍かったりすることが多い。やはり、怪我をしているのだ。

「布団かぶって寝ろ」

夜具を引き上げた影虎だったが、六花は抗って腕を伸ばした。

どうにかして影虎に触れたい。ここで癒せないと、明日になって後悔する。影虎は六花が起き出す頃には出て行ってしまはずだ。

「どうした」

怪訝そうな声がした。腕を伸ばして探る。しかし、近くに聞こえる影虎の声とは裏腹に、掌には布団の感触しかない。

しっかりと目を開けられればいいが、まぶたが重くて開けていられない。頭に霧がかかっているようにもやっとしていて、影虎に意識を集中していないと眠りに落ちてしまいそうだ。

「虎ちゃん」

もう一度呼ぶと、ようやく向こうから手を取ってくれた。ほっとして握り締めた。これでどうにか妖気を吸い取ることができる。

そんな六花の考えがわかってか、影虎の手がびくりと跳ねた。離そうとするが、存外、六花が力強く握っていたのですぐには離れない。観念したようで、ぎゅっと握り返した。

影虎は上体を倒すと、六花の額に自分のそれをくつつけた。

ざらついで、触れれば肌が泡立つような妖気をするすると吸い込む。じんわりと温かくなつた胸のあたりに影虎の妖気を溜め込んだ。きめの粗い妖気を丁寧に漉していくと、渦を巻いた妖気は次第に滑らかになり、それを影虎の体内に還してやる。

影虎はそれを身じろぎせずじっと待つ。

妖気を抜かれた方は少しばかり体に力が入らなくなる。けれど六花が浄化し終えた妖気が体に戻ってくると、ぬるま湯につかっているような温かさに包まれる。影虎は体が軽くなつたと感じたことで、六花が己の妖気を浄化し終えたのだと知る。

揉んだ薬草を当てて手当をしても、じくじくと鈍く痛んでいた左

腕の痛みが和らいでいた。傷を負ったことで熱もあつたが、気だるさも消え、体が軽くなっていた。

影虎の手を握り締めていた六花の手の力がゆるゆると緩んだ。影虎は離れがたいとでもいうように、離れ行く指に指をからめる。まろい線を描く六花の頬を掌で撫でると、くすぐったそうに顔をゆがめた。

ちらと笑みを口元に浮かべた影虎は、六花の頬に唇を寄せた。

「六花」

愛しげに自分を呼ぶその声が、六花はいつとう好きだった。夢うつつに六花は広い背中に腕を回す。湯屋で梳といて、今は邪魔にならないようにゆるく結わえた黒髪に頬をすり寄せる。はりのある硬い髪に鼻を突っ込み、目一杯息を吸った。

太陽を浴びた衣のようなお日様の匂いに混ざって、昔に端切れで作ってやった匂袋の香りがした。

ほつとして、絡めた指を握った。妖気を取り入れたときも胸が温かくなるけれど、それ以上に影虎の胸に抱かれたときの方が温かい。そのとき、ふつと唐突に冷えた空気が六花の体を撫でた。影虎が体を離れたためだった。嫌だ、もつとぎゅつとしていてと口にする前に、六花は眠りの淵へ沈んでいった。

影虎は寝息を立て始めた六花をしばらく見下ろす。そうして左の袂をたくし上げると、きつく巻かれた布を端から巻き取った。薬草の匂いの染みたその下から覗いた腕には、獣に咬まれた痕がぼつぼつと残るだけで傷口は塞がっている。

まどろんでいたからわからないだろうと思ったが、どうやら薬草の匂いで勘付かれたようだ。すっかり眠りに落ちた六花の衿元まで夜具を引き上げてやると、再び筆を手に取った。

さやけし玉の緒（5）

遠くから赤子の泣き声がした。あやかしの類だろうかとのろろと考えたのち、ようやく隣の夫婦にややこが生まれたことを思い出した。

六花はまぶた越しに眩しさを感じて薄く目を開けると、しょぼしよぼと何度かまばたく。格子窓の向こうには顔を出したばかりの朝日が覗いている。横から差す光が長屋に長い影を作っていた。

温かくて、もう一度眠りに落ちてしまいたくなる。

きつと影虎はもう奉行所へ向かったはずだ。朝餉を抜くのは体に悪いので、六花は握り飯を持っていくのが日課になっている。そうだ、朝餉の準備をしなくては。早くもどこかから煮炊きの香りが見えだよってきた。

布団から身を起こす。そこではたと動きを止めた。

とうに出て行ってしまったと思っていた影虎が隣で眠っていた。寝坊するなんて珍しいこともあるものだと思いつつ、しげしげと覗き込んだ。

布団は一式しかないので同じ布団で眠っている。二人で身を寄せ合って眠ることは慣れているため、今まで特に気になったり、意識したことはない。

影虎がいたから布団が温かったのかもしれない。

「……虎ちゃん」

間近でそつと呼んだが、起きる気配は微塵もない。薄く開いた唇が安定した寝息を立てている。常に怖がられる影虎だが、寝顔ばかりは無防備だ。顔を見て怖がる人たちに見せてやりたい。

六花は可愛いと思っっているのだが、可愛いなどと言ってしまえば絶対に隣で寝てくれなくなると思うので、口には出さないで秘めておく。

無駄な肉の削げた頬に指先でちゃんと触れた。六花の少し冷たい

手の感触で起きてしまっかと思っただが、影虎は変わらずに眠りの中にいる。珍しく寝顔が拝めたことで笑みが込み上げてきて小さく微笑んだ。

掌で頬をゆつくりと撫でる。

昨晩は、一体いつ頃まで符を作っていたのだろうか。六花は行灯を覗き込む。油皿に残った油の量で、だいたい暁八ツぐらいまで起きていたのかもしれないと見当を付けた。

頬を両の手で挟んで、額に自分のそれをくつつける。

影虎の重く沈むような妖気を吸い込んだ。温かくなった胸を通して戻してやると、影虎はようやく目覚めたのか眠そうな声を漏らした。

本当ならもう少し妖気を浄化させてやりたかったが、最近では六花が癒しの力を使うことにいい顔をしないのでこのぐらいにしておく。

「虎ちゃんお早う」

うつんと唸った影虎は眉間に皺を寄せて目元を揉み解した。

「お寝坊さん」

小さく笑った六花の声が妙に近くで聞こえたためか、ぎよっとした顔ではつきりと目を開けた。飛び起きようとしたが、半ば影虎の上に乗っている状態の六花はそれを押しとどめた。

寝起きなことあつてか怒鳴ったりせず、常よりも茫然とした様子で影虎は口を薄く開けた。

「なに…」

「起きちゃ、や」

不満そうに桃色の唇を尖らせた。

「虎ちゃん疲れてるもの。虎ちゃん倒れるの、わたし嫌」

「誰が倒れるって言ったよ」

六花は影虎の胸に顔をうずめて深く息を吸った。甘えているときの癖だ。困ったように視線を泳がせた影虎は、六花の頭をぽんぽんと軽く叩いてから起き上がる。

膝の上に乗って視線が近くなった六花の額に自分のそれを寄せた。

「心配しねえで、待ってる。今日はどこも行くんじゃねえぞ」

「後で握り飯こさえて持つてくよ」

「ん」

短く答えると手早く身支度を整える。六花はその様子をじっと見つめた。特にどこか痛めている気配はない。一先ずほっとし、急ぎ出て行った影虎を見送った。

六花は手早くたすき掛けをすると布団を丸め、部屋の隅に押しやり衝立で隠した。土間に置いてある手桶を持って井戸へ向かうと、釣瓶を手繰り寄せていた隣のお内儀が顔を上げた。

「お早う、りつちゃん」

「お早うございます」

背負っている赤子がむずがり、お内儀はよしよしと言って体を揺らした。

「泣き声がかましいでしょう。すまないねえ」

「子供は元気なのが一番ですよ」

頬つぺたを林檎のように赤くした赤子を見やった。ぷっくりしていて今にも弾けそうだ。

まだおねむなのかむすつとした顔つきになっている。六花は思わず顔をほころばせた。

井戸水を汲んでいると、朝餉の支度に取りかかる裏長屋のお内儀たちが集まってきた。井戸端にお内儀たちが集まってくると決まっておしやべりが始まる。

「そういやあ、まだ下手人とお捕まつてないのかねえ」

「ああ、あんたの旦那さんが見たつていうあれかい」

「ほんに、無事でよかったよ」

「くわばらくわばら」

六花は井戸端会議を背中であきながら手桶を抱えてその場を後にした。土間の水瓶に注ぎ入れ、何度か往復して瓶に並々と水を入れると、かまどの熾火を掻き起こす。火吹き竹を唇に当ててふうつと吹くと、ようやく蛇の舌のような火種が大きくなったので、そこへ

薪を足してやる。

「納豆はいかがですか、な〜っとお〜」

独特の節を付けた棒振りがやってきた。毎日同じ時刻に現れる棒手振りにはなかなか整った顔立ちをしており、お内儀たちに人気だ。棒手振りの姿を見つけたお内儀たちは黄色い声を上げて殺到した。

ちょうど米が底を尽きそうだったところだ。六花は米櫃の蓋をずらすと、残り少ない米を釜に移した。確か味噌も残り少なかった。

外からはお内儀たちの賑やかな声が聞こえてくる。話題はとつくと獣から離れていた。

昨夜は獣は現れなかったのだろうか。ぼんやりと考えていると、仄暗い行灯の灯りの中、符を準備していた影虎の背中が脳裏に浮かんだ。

炊き上がった白米を飯櫃に移し、荒熱を取る。握り飯を幾つか握って竹の皮で包んだ。ようやくとお内儀たちから解放された棒手振りからしじみを買ってしじみ汁にする。

簡単に朝餉を済ませると握り飯を風呂敷で包んで胸に抱えた。

朝日が川面に反射して、キラキラと秋刀魚の背中のように輝いている。その上を荷を積んだ船がゆっくりと渡っていく。船が下をくぐった橋を渡って、六花は奉行所へ滑り込んだ。

「おはようございます」

六花を見止めて目元を和ませたのは、影虎をはじめとする同心を束ねる、与力の源九郎だった。滅多に表情を変えることのない源九郎だが、六花に対しては優しい。それこそ六花を本当の娘と思っている。

常にどっしりと構えていて、深い森に根を張る巨木のような印象を受ける。源九郎は煙管を灰吹きに叩きつけて灰を捨てた。

「お早うさん。残念だが、影虎ならいねえぞ」

奉行所は見回すまでもなく閑散としていた。出払っているというか人気がない。かろうじて顔見知りの手下が一人いたので、六花は頭を下げた。

ここまで一斉に出払っていると捕物しかない。隣の旦那と産婆が見たという獣の居場所でも掴んだのだろうか。闇のような獣か、白い山犬か。どちらにせよ町人が犠牲になっているので凶暴には間違いない。

まるで底知れぬ闇がばかりと口を開けているようで怖かったと旦那が身震いしていたのを思い出す。

影虎は大丈夫だろうか。無事で帰ってきてくれるだろうか。

六花が不安げに顔を曇らせたことで、源九郎は子供でもあやすように六花の腕をさすった。

「心配しなさんな」

「でも、」

「影虎が強えのはおめえさんも良く知ってるだろ。信じて待つててやんな。どれ、握り飯は俺が預かっててやろう。食ったりしねえから安心しな」

源九郎が微笑みを浮かべると六花の不安は少し和らいだ。源九郎に撫でられると安心するのは、六花も本当の父親のように慕っているからかもしれない。

包みを受け取った源九郎は、煙管の先の椀形になっている火皿に刻み煙草を詰めながら、去り際の六花の背中に声をかけた。

「帰ったらねぎらつてやつておくんな」

六花は小さく頷いた。奉行所を出てこのまま真っ直ぐ戻ろうかと考えたところで足を止める。くるりと踵を返すと、街の西にある長屋の方に足を向けた。

打ち捨てられた長屋に住んでいる、眠ったきりの女とその旦那が気になった。とかく女の妖気は薄かった。元々なのか、それともそういう病があるのか、六花は医者ではないから詳しくわからないけれど、継続的に妖気の浄化と循環をしなければ良くはならない状態だ。

男が眠る女の手を取って愛おしそうに撫でていたのが脳裏に浮かぶ。以前のようにしゃべってくれれば希望を込めた瞳で見つめてい

た。それを思い返すと行かないわけにはいかなかった。

歩を進めるにつれて人がまばらになってくる。元より、西のこのあたりは昔に疫病が流行ったとかで、特に忌わしい場所とされていた。そのうち誰も近寄らなくなり、無人と化し、身寄りのない捨てられた者たちが集まった。

六花は胸の上に手を当てて、懐に飴が入っているかどうか確かめた。

影虎にこのあたりに近寄るなど言われたのに、結局ここまで来てしまった。影虎がきつく言うのは自分のためを思っただと理解はしているが、自分の力を必要としている人が待っている。

影虎が心配するのはわかっている。十二分にわかっているからこそ、裏切っているようで罪悪感が込み上げ、急ぎ足になる。

朽ちた長屋を伝っていくと、シャンと金属の触れ合う聞き慣れない音が耳に滑り込んだ。足を止めると、袈裟に身を包んだ行者が立っていた。

若い行者は人好きのする笑みを浮かべた。

「そなたが六花殿か？」

六花はまたたいて立ち止まった。行者が歩を進めるたびに錫杖が規則的な音を立てる。

「いやなに、宿を乞うたら、その旦那に不思議な術を用いて病を治す娘の話を聞いてな。興味が湧いて待っておったのよ。わしにもその御技、見せてはくれぬかの」

まだ青年に見える行者は、妙に落ち着いた物腰で六花に手を差し伸べた。一瞬、どこか悪いのだろうかとも思ったが、単純に六花の持つ力に興味があるようだ。

意識もしゃっきりしている見知らぬ殿方に額をくつつけるのはいかななものかと躊躇した。額を合わせるのは、より妖気を戻しやすくなるというだけで、手に触れるだけでも特に問題はない。極端なことを言えば、素肌に触れてさえいれば妖気を吸い取ることも戻すことも可能だ。

逡巡したのち、六花は「少しだけ」と言い置いてその手を取った。旅をしている行者にしては滑らかな手が六花の手をぎゅっと握る。目を閉じて、すっと細く息を吸うようにして目の前の行者の妖気を吸い込んだ。

「っ」

刹那、弾かれたように六花は目を開けた。体の中を奇妙な感覚が駆け巡り、肌が粟立つ。まるで生きた虫を大量に体内に取り込んだような気持ちになった。

「いやっ」

身じろいだが、行者はきつく握った手を離さない。六花はとうに妖気の吸収を止めている。むしろ吸い込んだ妖気を出そうとしているが、流れ込んでくる虫の勢いが強すぎて抗えない。指の関節が軋むほど強く握られた指先から、掌から、腕を伝って氾濫した河の水のように虫が侵入してくる。

「いやあっ!!」

しゃにむに暴れると、ようやく解放された。六花は勢いのままに倒れ込み、埃っぽい地面に頬を押し付けた。

「ひっ、あ…、」

泡を吹いて体を掻き抱く。体の奥深くが焼けるように痛かった。虫が臓腑を食い散らかしている。体が音を立てて蹂躪されていくのがわかる。それにつれて徐々に寒気が襲ってきた。みぞおちの震えから始まり、歯の根が合わなくなっただ。

いつものまに夜になっただらう。寒くて寒くて仕方ない。

焦点の合わない目から涙を流している六花を見下ろした行者は、口角をくっくと吊り上げた。

「どうだ、蠱毒に妖力を喰い破られる感覚は。そなたに恨みはないが、ここでわしに見つかつたのが運の尽きだったの。……隠れ住んでおればよかつたものを」

行者の独白は、とうに聴力を失った六花の耳には届かない。耳鳴りがして、音をうまく拾えない。耳朶には風の吹き荒ぶ嵐の音が絶

えず響いていた。

こわい。嵐だ。嵐がやってきたから、ひとりにしないで。

「……、ら、ちゃ……」

感覚のなくなった指先が地面を搔いた。爪の間に土くれが入り、割れて血が滲むが痛みはない。息を吸うたびに隙間風のように侘びしく喉が鳴った。

寒い。どうしてこんなに寒いんだろう。真っ暗で、何も見えない。ねえ、誰もいないの。誰かきて。そばにいて。

たすけて、と唇が動く。

たすけて、虎ちゃん。

指がわずかに土を搔いた。意識が暗転する直前に助けを求めて呼んだのは、ぶつきらぼうだけど触れる手は優しい、お日様の匂いにする連れ合いの名だった。

さやけし玉の緒(6)

影虎は旅籠の並ぶ通りに入った。旅籠屋が両脇に並ぶだけあって、笠を被り、風呂敷包みを背負った旅人の姿が多く見られる。人波の中を大股に歩きながら、すい、すいと左右に視線を走らせると、裏長屋に通じる細い路地に滑り込む。

裏には木賃宿がひしめいていた。行李を背負った歯磨き粉売りが挨拶と共に練り歩いている。その背中に「今日はどうだい」と声をかけると、影虎の姿を見止めた歯磨き粉売りの男は、ニヤリと笑った。

「おはようござえます、旦那。高級歯磨き粉はいかがですか。あの有名な房州砂を使ってやすぜ。薄荷、白檀、丁子、いろいろ取り揃えてやすぜ」

男は行李を下ろすと手を突っ込んだ。よくぞまあ房州砂の歯磨き粉など手に入れたものだと感じる。男は影虎の手下だ。昨日、取り逃がした赤毛の男を捜し出すように頼んでいた。

ひょうきんでとっつきやすい風貌の男は幾つかの歯磨き粉を取り出した。

「ここらの旅人さんたちにも人気です。房州砂ってえとちとお高いが、効果は抜群。特に薄荷は人気で、旅人さんらが薄荷をおくれと宿から飛び出してくるぐらいで」

手下は向かって左の木賃宿の二階を振り仰いだ。どうやら赤毛の男はそこに宿を借りているようだ。手下は赤毛の男を追い立てる手筈も整えている。その証拠に、影虎が「薄荷をくれ」と言うのを待っている。

それを合図に、待機している者が部屋から男を追い立てる。外でじっとしているということは、出入り口からではなく窓から追い落とすつもりなのだろう。「宿から飛び出す」というのはそういう意味だ。

影虎は懐に手を入れて符を確認すると目を細めた。

「そうかい。じゃあ、薄荷をもらおうか」

「毎度あり」

白い歯をむき出してニツと笑うと、頭上でがたがたと騒がしい音がした。怒声と、困惑した声が入り混じる。

二階の手摺から身を躍らせた赤毛の男の姿を確認するより前に、影虎は懐の符をまとめて放った。符は、つばくらのように風を切って男の草鞋の裏や着物に張り付いた。

赤毛の男が振り仰ぐ影虎を見止め、あつと目を見開いた瞬間、符が爆竹のような派手な音を上げて次々と破裂した。見た目は派手だが殺傷力はさほどない。

男は咄嗟に腕で顔を覆い、空中で身軽にくるりと反転すると、危なげなく着地した。かぶりを振ると頭をもたげて影虎をねめつける。「なにしゃがる。あいつ、お前の仲間か」

影虎はちらつと二階に視線をくれてやった。手摺にもたれてこちらを見下ろしているのは黒碩だ。確かに手荒く追い出すのなら黒碩は適役だ。茶化すような笑みを浮かべている黒碩から視線を外すと、赤毛の男をねめつけた。

「わりいが、白い獣を連れているとあれば、見逃すわけにはいかないんでな」

あえて口にするると男は眉間を寄せた。キツとばかりに影虎をにらむと目元に皺が寄る。その途端、男の体がふわりと淡い光に包まれた。

気配もなく飛びかかってきた山犬のあぎとを符をかざした手で制する。力と力がぶつかり合って、パシンと弾けるような小気味良い音を立てた。後方へ弾き飛ばされた山犬は身を翻して重力を感じさせない動きで着地した。

緑の鮮烈な匂いがふわりと鼻先をかすめる。獣臭さが一切しないので、山の精かなにかなのだろう。

山犬は男を守るように立ちはだかり低く唸る。その後ろで男は身

構えた。

「言っておくが、俺は誰も殺してない」

「それはここで聞くことじゃあ、ない」

両手に持った符を扇のように広げた。正面から真っ直ぐに擲つと、男と山犬は二手に跳んだ。目的を見失った符は空中で連続して弾ける。

頭上から「尻拭いしてやるから失敗してもいいぞ」と黒碩が擲掬する声が飛んできた。誰が為損しそんずるものかと舌打ちすると、符を手にした腕を後ろに薙いだ。ずらりと背後に並んだ符は、回り込んできた山犬の攻撃を防ぐ。

「ぐうううつ」

山犬は鼻面に皺を寄せて唸った。振り向きざまに、結界を破ろうと歯を剥き出す山犬の口腔に符を握り締めた腕を突っ込む。喉の奥に符を張り付けると一気に引き抜いた。

手がぬめる。引き抜いた手から血の混じった唾液が糸を引いた。

山犬はぶるんと一つ首を振って後ろへ跳ぶ。

「ちったあ大人しくしてな」

妖力を吸い込むように符に仕掛けをしておいた。山犬は四肢を踏ん張っているが、しばらく痺れてまともに動けないはずだ。

これで二度目だ、今度は逃がさない。

山犬が時間稼ぎをするあいだに行方をくらませようとしていた男は、しかし、縫いとめられたようにその場から一步も身動きできずにいた。足の裏から根が生えたように地面にぴたりとくっついて、爪先さえも動かせない。

「なにした」

半ば唸るように言う。

男の背後の帯の辺りに一枚の符が張り付いていた。初撃に空中で破裂させた符の中に、一枚だけ別な動きをするように命令したものがある。弾けた勢いに乗って、背後から男に張り付き、動きを止めるよう仕掛けておいた。

「前ばつか気い取られてると足下掬われるぜ」

左右に一枚ずつ符を飛ばすと、導かれたように長屋の壁に張り付いた。左右に広げた腕をその場で円を描くように真横へ滑らせる。すると、一枚だけだったはずの符が、まるで何枚も重なっていたかのように、影虎の手の動きにつられてぞろりと増えた。

横一直線に並んだ符は、男と影虎を囲んで円に形を成した。
「檻籠おりにめ」

言霊に反応して、符が一斉に蛇腹のように伸びた。まるで符の大きさに畳まれていただけだった紙が引つ張られてほどかれていく様に似ている。

渦を巻き、伸びた符は男の体をからめ取っていく。大きな繭玉になった男は、地面にごろりと転がった。同時に、身震いした山犬の姿がふつと掻き消えた。

符術檻籠は身動きを封じるだけでなく、捕らえたものの妖気も封印し、一種の冬眠状態にさせる。仮に山犬が男の妖力で実体化していたとすれば、姿が保てなくなるのも道理だった。

「終わったな」

跳び下りてきた黒碩は、繭玉をじつと見つめる影虎を怪訝そうに覗き込んだ。

「どうしたよ」

「呆気なかった」

「なんだそれ自慢か」

黒碩は舌打ちをして手下に運ばれていく繭玉を見やった。

目撃されたうちの『白山犬』は捕らえたが、呆気なかったせいか腑に落ちなかった。

下手人は大番屋に運び込まれ、妖気を遮断する牢へ入れられる。牢屋敷は別にあり、大番屋は取り調べを行うのみの拘置所という役割だが、逃げ出せぬように特殊な牢造りになっている。

牢を自由に開けたり閉めたり出来るのは、獄門道という術を身につけた看守だけだ。

ここで下手人を改め、牢屋敷へ送るか釈放となるかが決定する。大番屋には報せを受けた源九郎が一足先にやってきていた。隣には白碩の姿もある。看守によって繭玉が牢へ入れられると、ここで初めて影虎は符術を解いた。

繭玉の中央がひび割れ、左右に分かれて中に拘束されている下手人の下へ滑り込むようにして消える。冬眠状態に陥っていた赤毛の男は震えるまぶたを持ち上げ、何度かまたたくと、はっと我に返って飛び起きた。

「お目覚めかい」

腕を組んだ源九郎は常と変わらない声音で静かに言った。

「てめえが何したか、わかってるかい」

男は一瞬刺されたような顔をした。腰を浮かすとわななく唇から「違う」と声が漏れた。

「違う、俺は人を殺してなんかない！！ 銀狼は人を殺さない。山の精だ、他人の妖気を食ったりしない。肉ししだって食わない。俺は…、俺は止めようとしただけだ！！」

「おまえさん、何を知ってる。洗い浚い吐けば見逃してやらんこともない。…名は」

「……多聞」

源九郎に問われると、どんなに黙秘を続けていた下手人でもみなすんなり答える。巨木のようにどっしりと構えた雰囲気きふきに吞まれるのか、もしくは抗い難い何かを持っているのかもしれない。

「俺は、もっと東の、山ん中にある郷に住んでた」

多聞はぼつりぼつりと話し始めた。

東に広がる広大な深い森には、森を管理する番人がいる。人の形をした彼らは、精霊に最も近い者たちだ。古より精霊と暮らし、精霊と交じりながら暮らしてきた。特に精霊と心を通わせることが出来る者は、獣に姿を変えた山や森の化身を従えていた。

彼らの暮らしぶりは、山の中に点在する小さな郷に住むというよりは、天然の洞穴に居を構え、森の中に住まわせてもらっているといった感じに近い。森を開拓せずに自然そのままの形を借りている。あるとき、そんな彼らの元へ行者が訪ねてきて、一晩宿を乞うた。「そなたたちの御技を拝見したい」

行者は精霊に近い者たちの話を耳にして興味を持ったという。だが、余所者は近づけてはならない掟になっている。追いついたが、行者は頑として動こうとはしなかった。

「致し方あるまい。一晩だけだ」

仕方なしに行者を泊めることになった。一晩だけという約束つきだった。行者は酋長の家に泊まることになり、客人としてもてなされた。初めは外からやってきた珍しいものを見にやってきた者たちも、行者の話す外の世界に興味を持ったようで、酋長の家にはまるで乾季のあとの祭のときのように郷の者たちが集まった。

外界との接触を断ってきた森の番人たちは、行者の話す外の世界の話に耳を傾けた。特に若い衆は目を輝かせてあれやこれやと質問を繰り返していた。

「外の世界にはいろんなもんがあるんだなあ」

しみじみと呟いたのは多聞の弟だった。多聞は憧れの混じった声にふと弟を覗き込んだ。

「なんだ、外に出たいのか」

「兄上は出たいと思わないの」

多聞は酋長の長兄で、立派な番人となって森を守っていかねばならぬことは重々承知していた。それに、多聞はこの森が好きだった。森も、森に棲む精霊たちも、精霊と会話を交わせることも好きだった。

郷を出ようなどとは露ほども考えが及ばなかったので、行者の話も聞いても興味は湧かなかった。

「俺はこの森が好きだからな」

そう言うと、弟はふうんと意外そうな顔つきをした。

肉の焼ける香ばしい匂いや、雑穀の炊ける湯気の香り、男たちの笑い声が部屋を包んだ。人見知りをする幼馴染も珍しく陽気に振る舞っていた。行者が宿を求めにやってきた当初は断っていた父親も、今ではとっておきの酒まで出してきて酌み交わしている。

多聞はさほど興味がなかったので、早々に外へ出て行ってしまった。

郷の者はみな家族のようなもののだが、賑々しい中にいると時折息苦しくなることがあった。そういうときは決まって一人で森へ踏み行つて、精霊たちと過ごした。このときも、森の精である銀狼と夜風に吹かれながら星空を見ていた。

岩棚の縁に座つて星のまたたく夜空を見上げた。眼下には杖をいっばいに伸ばした樹木が風に揺れている。空にばかりと浮かぶ月に手が届きそうだった。

「雨が降りそうだ」

手を伸ばしたとき、風が雨の匂いを運んできた。銀砂を振り撒いたような星空の下で多聞は立ち上がると、銀狼の首を撫でた。

「お前もお帰り」

帰る道すがら、もうそろそろみな解散しただろうかと考えた。多聞にとつては、みなが行者に興味を持ったことが不思議だった。

びゅつと突風が吹き抜けた。雨の前の湿った匂いが鼻先をかすめる。あつという間に真っ黒い雲が空を覆い、音を立てて大粒の雨を降らせ始めた。

雷鳴が頭上で轟き、多聞は首をすくめる。

住居にしている洞穴に駆け込むと露を払った。

「参った」

独りごちると、さっきまでの賑やかさは嘘のように静まり返っている洞穴の奥へひたひたと進んでいく。

みな帰ったか、それとも深酒しすぎて酔いつぶれたか。

大人のくせに仕様のないことだと溜息をついたところで足を止める。酔いつぶれたにしては静かすぎた。いびきの一つも聞こえやし

ない。進むにつれて、雨の日に込み上げてくる土の匂いとはまた別の、金臭さが鼻を衝いた。

外では物音を掻き消すほどの驟雨が降っている。細い通路の先からぼんやりと仄明るい蠟燭の灯りが漏れていた。揺れる灯りに照らされて、ひよろりとした影が壁に映った。

踊る影にほつとして、多聞は広間になっている部屋へ足早に向かった。

「まだ、誰か起きて……」

むっと込み上げてくる金臭さに呼吸が止まる。

果実酒の赤ではない、もっと鮮やかで黒味を帯びた液体が一面を染め上げていた。足下に倒れている幼馴染は恐怖に顔を歪めたまま事切れている。隣のおじさんとおばさんも、気難しいけれど多聞に良くしてくれたじいさまも、赤黒くてらてらとした液体で体が濡れている。

胸震いと共に嗚咽が込み上げて来て、体を二つ折りにするとせり上げてきたものを吐き出した。

「あに、うえ」

かすれたしゃがれ声がかすかに漏れた。顔を上げると、奇妙に四肢の曲がった死体が連なる向こうに、顔を真っ赤に染め上げた行者が倒れていた。多聞を一心に見つめた行者の口が「兄上」と動く。

どうして行者が、自分を「兄上」などと呼ぶのだろう。

兄上と呼ぶのは、一人しかないのに。

顔を引きつらせたままの多聞は、行者のしわがれた頭骨に錫杖が突き刺さったことでひっと息を詰めた。

「よいよい、丈夫で、良い肉体だ」

錫杖の先を引き抜いたのは見紛うことなく弟だった。行者はがくりと力尽きたようにこうべを垂れた。それきり身じろぎひとつしない行者に一瞥をくれた弟は、多聞を見てにやりと笑った。

「やれ、呆気なかったのう。精霊を使役してもこんなものか。さりとて、番人ゆえ、さらに高みを目指そうとは思わぬのだろうなあ」

「……おまえ、だれだ。なに言ってる」

弟じゃない。こんな風に見下したように笑ったりしない。

外見は弟そっくりの、しかし、見たこともない邪悪な気配を漂わせる彼は、胸に手を当てた。

「我が名は宗玄。東の森の、精霊に最も近き者たちの偉才と、この者の体、いただいた」

さやけし玉の緒（7）

多聞は手元をまじろぎもせずに見下ろした。

「宗玄は、蠱毒という術を操る怪僧だ。物の怪同士を戦わせて、勝った方が負けた方の妖力を手に入れる。あいつは自分の物の怪をけしかけて俺の郷の精霊たちを吸収したんだ」

そうして、多聞の想像もつかない方法で古い肉体を捨て、弟の肉体を支配した。あのときに倒れ伏していたしわがれた行者の体の中にいた弟が、すぐるように助けを求めていた瞳が今でも瞼の裏にちらつく。

多聞は指が白くなるほど手を握り締めた。

「俺は、銀狼と一緒に郷を出て、宗玄を追ってここまで来た。あいつの使役している物の怪は人の血肉を喰わないと生きていけない。俺は、それを止めようとしただけだ」

宗玄の使役する獣と銀狼とでは生命維持のために必要としているものが違う。銀狼は山の精霊で深い山の神気を好む。宗玄の獣は人為的につくられたもので、恨みと血にまみれている。対峙したときも元々の姿がわからなかった。銀狼と獣は本質が違うのだ。

多聞は顔を歪ませた。その様子を見つめていた源九郎は、組んでいた腕をほどくと顎を撫でる。

「どれ、嘘はついていねえようだ」

嘘なんかついてない、そう言い返そうとしたとき、多聞は胸に突き刺さったそれに気付いた。胸に深々と突き立った小刀が青白い炎を上げて浮かび上がった。感覚で痛いと思う前に咄嗟に息を詰めた。「痛みはないだろう。肉体に刺さってるわけじゃあねえからな」

面から血色を失くし、意識が遠のきそうになった多聞はどうにか顔を上げた。

「それはおまえさんの魂に刺さってる。俺の刀は真か偽りかを見抜く。下手人が嘘偽りを言えばすぐにわかるさ。おまえさんは嘘をつ

いていない」

こんなものが刺さっていたなんて全く気付かなかった。空恐ろしさを感じて多聞は震える手で冷や汗を拭った。

喧嘩っ早い黒碩が不敵な笑みを浮かべた。

「だったら、その野郎をとっ捕まえればいいだけの話だ」

明日の天気の話でもするように簡単に言っただけのけた黒碩を、多聞は奇人を見るような目つきで見やった。

「宗玄の使役する獣は闇の獣だ。それに、今までにたくさんの物の怪を吸収してる。普通じゃ太刀打ちできない」

「やってみなけりゃわかんねーだろ。お前がこのあたりをうるついでたつてことは、その野郎はまだ近くにいるんだろ」

腕まくりをして今にも飛んで行きそうな勢いの黒碩は、じっとしていられずに腕をぐるぐると回した。人の話を聞く気がない黒碩に呆れかえったのか、多聞はわずかに怪訝そうな顔をした。

「宗玄はまだこの街にいる。ずっと探し求めてた白狐を見つけたと言ってた」

「白狐？もうとうに滅んでしまったとされる一族だろうに」

白碩が首を傾げる。

白狐は名の通り、白い毛色の狐の神の総称だ。神通力を持っており、自在に森羅万象を操ることが出来ると言い伝えられている。ただし、数千年前に姿を消している幻の種族だ。当時、一体どのような出来事があったて姿を消したのか、今では文献も残っていないので誰も知る者はいない。

その後、姿を見た者もどこへ消えたのか知る者もないので、滅びたものとされていた。

多聞も考えるような仕草をして首を捻った。

「俺も、こっぴどくやられたあとだったからうる覚えだ。でも確か、玉が欲しいと言ってた。妖気を溜め込むことが出来る玉だと。白狐は体内に玉を持っていて、他者から妖気を取り込んで、その玉に溜め込むことができるそうだ」

「他者から妖気を取り込む？」

だんまりだった影虎が不意に鸚鵡返しに聞いた。表情が硬かったことで、多聞も何か言っただけいけないことでも口にしたりするかどうかとぎこちなく頷いた。

そのとき、身を翻した影虎の腕をはつしと掴んだのは白碩だ。引き留める手を乱暴に振り払った影虎の顔には明らかに焦燥が浮かんでいる。

何を焦っているのか手に取るようにわかった。その場にいた誰もが、彼女の持つ特異な能力を知っている。

白碩はゆつくりと噛み締めるように問うた。

「りっちゃんが、そうだという確たる証拠は」

「ない。あいつは自分の本性を知らない。あいつ自身が知らないことを、俺が知ってると思うか」

自分が何者なのか知らない妖怪は滅多にいない。あやかしとしての生を受けたときから、漠然と自分の元の姿というものを知っているはずだ。知らないなどということはあり得ない。

「知らないなんてこと、あるわけない」

物腰の柔らかな白碩が鋭い声音で返したことで、思わず相方の黒碩がまたいた。影虎と同じく白碩にも動揺が見えた。

「どうとも言え。くだらねえ問答していらねえからな」

影虎は踵を返した。そこで手下がまるび出てきたことでたたらを踏む。肩で息をした手下は整える間もなく壁に手をついた。

「てえへんです、街の東でなんだかわからねえもんが大暴れしてやすー！」

背筋を冷たい手でふつと撫でられた気がした。多聞は血相を変えて格子にすがりついた。

「そいつは真つ黒で闇のような獣じゃないか」

「獣かどうかは…、確かに真つ黒だったが」

「宗玄だ！！ あいつの獣しかない！！ おいあんた、どこかに行者はいなかったか？！」

手下は食ってかかる見知らぬ男に鼻白んだ。首をかしげると口の中でもごもごと「見かけちやいねえ」と答える。

多聞は険しい表情をしている源九郎を見やった。

「頼む、俺を出してくれ！俺の銀狼だったらあいつの居場所を探し出せる。今、獣の近くで操っていないとすれば、あいつはきつと別の場所で白狐を捕まえてるはずだ。あの獣はあんたたちの注意を引きつけるのに十分だろ、違うか？」

源九郎は白碩をちらと見やった。視線を受けた白碩は足早にその場を離れ、そうして看守を引きつれて戻ってきた。看守が格子の前で印を結び、何事かを呟くと、格子はふつと消え失せた。

「おまえさんを信じよう。ただし、違えたときは命を落とすと思え」胸に突き立った小刀が、源九郎の言葉で青白い炎を燃え上がらせた。多聞は短く声を上げたが、炎が多聞を包み込んだのは一瞬のことで、小刀と共にふつと掻き消えた。

約束事を交わすときには小刀は魂の奥へ入り込む。これで万一でも多聞が寝返ったときには小刀が多聞の体を引き裂くだろう。

源九郎が手下に素早く駆け寄った。

「怪我人は」

「ざつと見て二十は」

「ここまで来てくれたとこ悪いが、もうひとつ走りして布陣の用意と、このことを医者に知らせてくれ」

「お安い御用で」

頭をひよいと下げると手下は鉄砲玉のように飛び出した。ここでいう布陣は結界のことだ。町人の安全が第一なので、大捕物のときは必ず布陣を張る。術の経験のない者でも扱える簡単なものだが、同心以上でないとは許可が出せない。

後ろ頸に手をやった源九郎が影虎に向き直った。

「影虎よ」

「俺あいかねえ」

「誰も来いとは言ってねえだろうが」

影虎はそむけていた顔を思わず上げた。源九郎は影虎の肩に手をやると軽く叩いた。

「あの子を捜しに行つてやんな」

わずかに驚きの色を瞳に浮かべた影虎は、ややあつて強く頷いた。焦燥の消えた瞳を見て源九郎も口角を上げると、銀狼を呼び出した多聞を振り返つた。

「多聞、おまえさんは影虎についてつてやってくれ」

多聞はぎゅつと顔をしかめた。自分から協力すると申し出たものの、今しがた自分を捕らえた、いわば敵だった相手に力を貸すことが今一つ納得できなかった。

協力の対象が影虎ではなく源九郎だったらすんなりと受け入れたはずだ。

影虎は不機嫌そうに眉根を寄せた。

「ぐずぐずすんな」

「っ捜し出すのは俺の銀狼だぞ?!」

さつさと踵を返して先に行つてしまふ影虎を、この野郎という罵声と共に多聞が追いかけた。

銀狼が足取りも軽く二人を追い越す。大番屋を飛び出すと、銀狼は脇目も振らずに鼻先を西へ向けている。

寝起きしている長屋の方向ではない。やはり家でじつとなどしていなかったかと嘆息すると、影虎は真つ直ぐに伸びる通りの先をねめつけた。

「なあ、あなたのその知り合い、あなたの何」

並走する多聞が上がる呼吸の合間に問うた。対する影虎は顔色一つ変えずに多聞に一瞥をくれる。その態度が気に食わなかったのか多聞は唇を尖らせた。

「聞いてんだから答えたらどうだ」

「拾った」

「はあっ?」

犬か猫でもあるまいし、拾ったとは何事だ。それに、拾ったとい

う返答は質問に対して適切ではない。しかしそれきり押し黙り、言葉が続くわけではなかった。

とつつきにくい奴だと視界の端でちらちらと様子を窺う。

「あんたの女房か？」

口にした途端、並んで走るなどもつてのほかとでもいうように影虎は速度を上げた。ようやくとついて行っていた多聞はあつと声を上げて影虎の背中を必死に追いかけた。

銀狼は賑やかなしい街を背に走り続け、人の気配のない閑散とした地区に入った。長屋の屋根には雑草が生えている。人が入らなくなつて久しいのか雨ざらしで手入れもされていない。壁には穴が開いていたり、戸は傾いて完全に閉まらないものが多かった。

秋の木の葉のようなカサカサという干乾びた音しかしない。多聞は砂埃の舞う辺り一帯に忙しなく視線を走らせた。

「なんか、あんまり長居したくないところだな」

銀狼が歩を緩め、追いついた多聞に鼻先を擦りつけた。

首を手荒く撫でてやると、多聞は荒れた長屋を指差した。

「あのあたりだな。どうする、様子を見るか？」

「そんな時間はねえな」

短く吐き捨てる符を手にして、大柄な体躯に似合わぬ身軽さで長屋の屋根に躍り上がった。呆気にとられた多聞が止める間もなく影虎は符を擲った。

「獄火！！」

屋根にぴたりと張り付いた符から生じた紅蓮の炎は、燃え盛り一気に広がった。一瞬にして焼け尽し、いまだチロチロと炎の欠片を残すそこから影虎は飛び降りた。

さやけし玉の緒(8)

突然燃え上がった屋根を振り仰いでいたほつそりとした影は、ゆらりと立ち上がった影虎に目を留める。錫杖を手に袈裟をまとっているのはごくごく若い男だ。剃り上げた頭は青々しく、頬も肉付きが良い。大人になりきれしていない青年と少年の間の独特な雰囲気がある。

斜に見あっていると、戸をぶち破って銀狼が踊り出た。姿勢を低く構えるその後ろから多聞が飛び込んでくる。行者の姿を見止めると、キツとばかりに目を吊り上げた。

「宗玄!!! 今日こそみなへの仇取らせてもらうぞ!!!」

「飽きもせずはまだ追いかけてきおったか、やれ面倒な。貴様の相手をしておるほど暇ではないわ」

くつくつと嗤う宗玄の足下には小柄な少女が倒れていた。

いつも桃色でふっくらした唇は、今は弛緩して薄く開かれています。まぶたは開いているがそこから覗く青味があった瞳は虚ろで焦点が合っていない。くたたりと力無く畳に腕を投げ出して、呼吸をしているのかさえわからない。

「どけよ」

影虎が低く言うと、宗玄は冷えた瞳を影虎に向けた。怒りの炎を宿した瞳が真っ直ぐに宗玄を捕らえた。

「どけって、言ってるんだろ!!!」

またたきの一瞬で宗玄の懐へ潜り込み、脇差の鯉口を切った。キン、と甲高い音が響く。錫杖で初撃を受けた宗玄は、口角を吊り上げる。

「何を怒り狂うておる。その娘か? 残念だったのう、もう手遅れだ」

錫杖が下から脇差を掬い上げた。両腕を上げる形になった影虎は、錫杖を払うと胴に隙が出来る一瞬前に後ろへ下がった。

払われた宗玄は手を返し、畳みかけるように一步踏み込み、気合
いと共に錫杖の先で脇を衝く。脇腹から飛び散った血飛沫が色褪せ
た畳に鮮明に色を付けた。影虎はひゅつと短く息を吸い込むと、取
つて返した錫杖を受ける。火花が散り、鐙の耳障りな音が響いた。
直接の攻撃は避けた。しかし、見えない刃が肉を裂いた。細腕か
ら繰り出されたものとは思えないほど重い攻撃を受け止め、力んだ
ことで脈と共に溢れた血が着物を汚す。

着物がぐつしよりと生温かい液体で濡れている感触をおぼるげに
掴む。手が痺れ、脂汗が滲む。影虎は力任せに薙ぎ払い、宗玄はそ
の勢いに乗って空中でふわりと一回転し、着地した。

そこへ銀狼があぎとを開いて襲いかかる。が、体をさばいて幽鬼
のようにするりとかわした。

それ以上は動きを見せない宗玄から視線を離さずに後退した影虎
は、横たわった六花の肩に触れた。と、世界がぐるりと反転し、額
に何かが触れた。

「はっ」

知れず呼吸が上がり、ささくれた畳に手をついた。

そうしてこうべをもたげた。刹那に何が起こったのか理解できず
に茫然とした。めまいで体が傾いで額を畳に押し付けることになっ
たとわかったのは、一拍置いてからだだった。体に力が入らない。冷
や汗がこめかみを伝って、雫となって顎から落ちた。

多聞が呻いたのが背後で聞こえたが、体の下で六花が息を吸った
音の方が鮮明だった。

「六花」

呼びかけると、虚ろだった瞳に光が宿った。何度かまたたき、視
線がゆらゆらとさ迷い、ようやく六花の瞳は影虎を映した。

「とら、ちゃ」

か細い声が影虎の名を呼んだ。目を覚ましたことでほつとしたの
も束の間、血相を変えた六花は影虎を押しつけて体の下から這い出
た。大した力ではなかったはずなのに、六花に触れられた瞬間に全

身の力が抜け、その場にくずおれた。

六花は踵で畳を蹴って後ろに下がり、小刻みに震える手で体を掻き抱く。

「近寄らないで……!!」

宗玄がその様子を見て愉快そうに笑った。

「あ奴の妖力をさんざ吸っておいて、まだ足りぬのか。化け物よの。それ、周りをよく見てみい。全てそなたが仕出かしたことだ」

宗玄はすつと通った指で多聞を指差した。

多聞は気が遠のきそうになるところを、歯を食い縛って堪えるとかぶりを振った。多聞の意思に応えて銀狼が跳びかかったが、錫杖で簡単に振り払われる。キャンと子犬のような鳴き声を上げて畳を滑ったかと思うと、白い姿は掻き消えてしまった。

多聞が意識を保っていられなくなったのだ。事実、影虎も泥に沈みそうになる意識を保っていることが精一杯だった。ぐらぐらする頭を押さえて宗玄をねめつけると、驚きと喜色の混じった声を上げた。

「そなたも妖気を吸われたはずだが、いまだ意識を保っているとは天晴れだ。やれ僥倖よ。白狐のたがが外ればそれでよし。そうでなくとも玉だけ抜き取れば良いと思っておったが、これは思わぬ拾い物をした」

「もつやめて……」

六花はぎゅつと膝を丸めると頭を抱えた。怒りを越えた感情が湧き上がり、影虎は鉛のような体を叱咤して上体を起こす。

「六花になにした」

「なに、一寸ばかり妖気を吸い取っただけよ。急激に減った妖気を取り戻そうとして、わしの使役の妖気を自ら吸いよった。それに、そこな女も……まあ大した妖気は残っておらんのだが」

宗玄が顎をしゃくる。六花は怯えてびくりと肩を跳ねさせると身を固くして震えた。

宗玄が示した部屋の隅には、確かに着物をまとった人の形をした

ものが打ち捨ててあった。袖から覗く手首は痛々しいほど細い。妖気を吸い尽くされると眠ったような形で事切れると聞いたことがあるので、元々病を得ていたのだろう。

「こ奴が残り少ない妖気を吸い取って、殺したも同然だ」

六花はがくがくと震えて耳を押さえた。意思に反して多量の妖気を求めた体が、近くの妖気を洗い浚い吸い取ってしまったのだ。結果的に女は死んでしまった。

六花は妖気を吸い取られて絶命した光景を目の当たりにした。宗玄が恐ろしくて震えているわけではない。暴走している自分が怖いのだ。

「六花」

影虎は腕を伸ばしてこちらへ来るように視線で促した。しかし、六花はまなじりからぼろぼろと涙をこぼして首を横に振るだけだ。

「いや。わたしの体、おかしいの。もういらぬのに、妖気がいっぱい流れ込んでくる。黒いのの妖気がいっぱい流れ込んできて、あの人も、わたしが……」

殺した、と消え入るような声で言って、胸を握り締めて嗚咽を上げた。

今も、体の中で闇の獣の妖気が嵐のように荒れ狂っている。意識を持っていかれそうなほど凄まじいこの妖気に比べれば、妖気を喰い荒した虫など些細なものだ。

今まで吸い取った妖気の渦が喉までせり上がってきているのに吐き出せない。妖気の循環は何度も経験しているのに、一体どうやって還していたのかわからなくなった。溜まりに溜まった妖気のせいで胸のあたりがぱんぱんに膨れている気がした。

「もういらぬ、もういらぬのに！！ 苦しいの、体が弾けそう……、虎ちゃん、苦しい、たすけて」

「まだだ、まだ足りぬ。もっとその身に溜めぬか。そんな男の妖気を吸い尽くせ、ほれ」

宗玄は錫杖でとんと畳を突いた。途端に、六花が身をよじって悲

鳴を上げた。

「そなたの身の内にある妖気は、わしの使役の妖気ぞ。操ることは容易いわ。それ、早うそ奴の妖気を吸わぬと四肢がもぎ取れるぞ」

「やめ、て…!!」

宗玄は子猫を掴むようにして首根っこを引つ掴んだが、その腕に符がひたりと張り付いたことで動きを止めた。白刃が閃いたのは、宗玄が六花を手放し跳び退った後だった。

宗玄は血の滲んだ指先を舐めるとうつつそりと笑う。

「きたねえ手で触んじゃねえ」

刀を引つ提げた影虎は宗玄を斜に見やった。

六花をその胸に抱いたまま膝が崩れ、覆いかぶさるようにして倒れ込む。下敷きになった六花が、体のねじ切れそうな痛みからではなく、押しつぶされた苦しさから呻いた。影虎が動いた今、六花を苛んでいた苦痛は消え失せていた。

「いや、」

六花は胸のあたりが熱を持ち始めたのを感じ取った。影虎の妖気を吸い取っている。胸から腹にかけて熱は広がり、腕や脚、その指先まで全身が燃えるように熱い。反対に、影虎の体温がどんどん下がっていくのがわかった。

「いや、いやだ、いやだよ……、虎ちゃんはなして、いや、そんなのいや」

胸板を押したが、びくともしない。それどころか強い力で抱き込まれた。

影虎の脈が小さすぎて、じつとりと湿った首筋に押し当てた耳には何の音も入ってこない。耳の奥では寄せては返す潮騒の音が木霊していた。心の臓がどくどくと暴れ回って跳び出そうだ。脈打ったびに体が痙攣した。

糸を手繰るように、体が勝手に妖気をするすると吸い込んでいる。細い糸の先にある残りの妖気の塊はそう大きくはないことがはっきりと見えた。

「やめて」

妖気を吸収すると胸が温かくなるけれど、それよりも何よりも、影虎の胸に抱かれるのが一番温かった。

それなのに、今は氷のように冷たい。

「いやだあつ！！」

六花は泣き、叫んだ。

どくんと大きく心の臓が跳ねて、全ての感覚が遠のいていく。ただ、胸のあたりが火に炙られているように熱く、はち切れそうだった。浅い呼吸を繰り返し、虎ちゃん、虎ちゃんとうわごこのように何度も呟く。

宗玄は意識を手放した影虎の体から力が抜けたのを見て取って、足で蹴り上げてどかせた。妖気さえ搾取できればもう用はない。邪魔者を脇へ押しやると、虚ろな瞳から涙をこぼし続ける六花の白く長い髪を驚掴みにした。

引っ張り上げても悲鳴さえ上げない。妖気を溜め込み過ぎて器が壊れることはよくあることだが、玉さえ手に入れば器などどうなっても構いはしない。

うなじから錫杖を差し入れると濡れそぼった上衣を剥いた。熟しきつていない果実のようなつんとした乳房があらわになる。陶器のような白い柔肌はしっとり濡れ、玉になった汗が浮いていた。

その濡れた肌の上に宗玄は指の腹を滑らせた。首筋から鎖骨をなぞり、早鐘のように脈打つ心の臓の真上で止まる。掌をあてがっているだけで、肉越しにも濃厚な妖気の脈動が伝わってきた。

宗玄が掌から力を送ると鳩尾あたりの肉が弾け、飛び散った血が頬を濡らす。

六花は変わらず虚ろな様子だったが、さすがに声にならない悲鳴を上げた。裂けた肉の間から手を差し入れると、六花は弱々しい呼吸の合間に声を漏らした。

生温かい体内をやわやわとまさぐると、指先に硬質な感触が当たる。

思わず笑みが浮かんだ。湧き上がる感情を止められず、宗玄は喉を痙攣させて笑った。

「ひ、ひひ、ふふふ、ふはははははっ、手に入れた……！！ 狐玉を手に入れた……！」

硬く、熱い玉を握り締め、宗玄は引き抜いた。

「っ?!」

瞠目してはたと動きを止めた。引き抜こうとしたが、握り込んだ玉はまるで据え付けられているように身動き一つしなかった。浮かべた笑みが歪みに変わり、躍りになって血にまみれた片手をもう一方で引つ張る。

「なぜだ!!! なぜ抜けぬ!!!」

咆えた声は、ぎゃっという悲鳴に変わった。

雷にでも打たれたかのように全身が痺れた。背後から影が落ちたことで、ぎくしゃくする体で振り返る。

そこには符を手にした影虎が立っていた。

「貴様、なぜ動けるのだ」

一枚の符を啜えた影虎は、言葉を返すことなく両手に持った符を左右に投げ払った。確かに体に残っていた妖力は尽きた。しかし、あらかじめ妖力を込めておいた符を啜え、取り込むことによって、もう一度動くことを可能にした。

あとは宗玄の注意が影虎から逸れ、六花の体につけておいた符の効力が発揮されるのを待つだけだった。

広げた腕を薙ぐと、手の動きに合わせてぞろりと並んだ符が取り囲んだ。真白な符に目玉などついていないのに、周囲からぐるりと見られているかのような圧力を感じ、いっそ不気味だった。

影虎は指で印を組む。途端に、ぱたぱたと軽い音を立てて瞬時に伸びた符が宗玄の体を絡め取ってゆく。悲鳴を上げた口を塞ぎ、四肢を拘束する。

「馬鹿な、このっ……、……」

抗った声さえ締め上げられ、真白な繭玉が畳に転がった。

熱い吐息を吐いた影虎はくずおれて膝をついた。傷を負った脇腹に腕を押し付けると、蠟人形のように仰向けに倒れている六花の赤く染まった胸に符を数枚張り付けた。

見る見るうちに真白な符は鮮血で染まってゆく。かぶりを振った影虎は六花の顔の横に手を突き、肩で大きく息をした。

真つ赤な牡丹のような染みを作った符の上に掌を乗せる。

「……俺の命をくれてやる。だから、死ぬな」

畳に転がっていた狐玉を震える手で握り込む。掌に収まるほどの大きさのそれは、淡い桃色で、ほんのりと熱を持っていた。身じろぎ一つしない六花の手に握らせて、その上から包み込む。細い指はいつもよりもずっと冷たく、硬かった。

薄れゆく意識の中で、仕掛けた符から合図の花火が上がったのを聞いた気がした。

さやけし玉の緒（9）

唐突に、どう思う、と聞かれ、影虎は我に返った。

「は」

呆けた顔をしている影虎を覗き込んだ白碩は、影虎が聞いていなかったであろう話を律儀に繰り返した。

「多聞をここに置いてやるかどうかという話。僕は賛成だ。彼の力は使えると思うし、なにより人手不足だからね。本人も行くところがないって言うし。どう思う」

「どうって」

「随分ぼんやりしてるね。傷でも痛む？」

「そんなんじゃねえ」

影虎は脇腹に掌を当てるとそっぽを向いた。

獣が次々と町人を襲った事件は収集がついた途端に、町人たちの記憶から薄れていった。日々の暮らしが穏やかなことを願う人々の意識からはこうして事件は忘れ去られてゆく。

しかし、全ての者たちが忘れるには、まだ時間がかかる。下手人を捕らえ、聴取する者たちにとってはまだ記憶に新しい。

あの日、宗玄の使役する獣を退治しに向かった南町奉行所の一行だったが、召捕る前にその姿は掻き消えてしまった。同時に、六花の行方を追っていた影虎から合図の花火が上がった。結果的には獣を操っていた本体を召捕ったので事件は解決したが、駆け付けた一行の到着がもう半刻でも遅ければ、影虎はここにはいなかったかもしれない。

妖気を極限まで酷使した上、脇腹に手傷も負っていた。五日ほどこんこんと眠り続け、ようやくと枕から頭が上がるようになったのは先日のことであった。

脇腹の傷は処置が正確だったのか、思ったよりも痛みは少ない。呆けている理由は別にあった。

影虎はやにわに立ち上がる。

「俺が決めることじゃあ、ねえしな。……先に上がらせてもらっせ」
ひらひらと手を振って奉行所を後にした。丸い背中を見送った白
碩は多聞の声で振り返る。

「なあ、まだ起きないんだな、ええつと」

「ああ、りっちゃん」

「うん、りっちゃん？」

多聞は視線を泳がせて、何かを思い出すような仕草をした。

「そのりっちゃんって、あいつの女房なのか？ あいつに聞いても
教えてくれなくてさ」

直接聞いたのが、勇気あるな、という言葉は胸に秘めておく。苦
笑いを浮かべて小首をかしげた。

「いやあ……、違うと思うけど、僕の口からは何とも言えない」

「なんだそれ」

多聞は口をへの字に曲げた。

天秤棒の先に二つずつ桶を下げた棒手振りが、夕餉の支度を始め
る長屋を回っている。若いお内儀が品定めをしていると、麻裏草履
をつっかけた大工がやってきた。「お前さん、お帰り」とぱつと顔
をほころばせたお内儀を見た途端、切なさに似た苦味が込み上げた。
虎ちゃんお帰りと違って、煮炊きの香りと共に迎えてくれたのが
昔のこのようだった。

六花はまだ目覚めない。そう影虎は聞いていた。

親と言っても差し支えないほど、身寄りのない影虎と六花の面倒
を見てくれている源九郎とお内儀が、眠ったままの六花の世話をし
てくれている。自分では四六時中そばにしていることが出来ない
ので、それは大変有難いことだった。

不安なことがあるとすれば、それは六花がいつまでたっても目覚
めないということだ。意識が戻ったらいち早く教えてやるからと言

つてくれた源九郎だったが、影虎が容体を聞いても難しい顔をしていることが多い。

(あれから、どれぐらい経った)

立って動いている六花を見たのは随分と前のことのような気がした。最後に見たのが、血にまみれて人形のように手足を投げ出している姿だった。触れても、ぴくりとも身動きしない冷たい体の硬い感触が手に残っている。

怖い、と思った。

初めて怖いと思った。今までどんな死線もくぐり抜けてきたけれど、怖いと思ったことなど一度もなかった。それなのに、六花を失うことがこんなにも恐ろしい。

この目で無事な姿を確認しなければ、血みどろの六花が最後の姿になってしまう。

虚ろな青味がかった瞳がまぶたの裏にちらついて肌が粟立つ。ぞつとして腕をさすると、三歩ばかり離れたところで子供が真ん丸な瞳でこちらを見上げていた。目が合うが、子供は泣き出すことなく不思議そうな顔をしている。

手にした赤い風車がカラカラと音を立ててゆっくり回った。現実を引き戻され、喧騒が耳朶に戻ってくる。立ち止まっていたことに気付いて、慌てて一步を踏み出した。

職人の頭や大店の番頭などが暮らしている表店では、湯屋帰りのお内儀たちが談笑にふけていた。夕餉の支度の時刻だが、道端で話しこんでいるところを見ると、人を雇っているところも多いようだ。お内儀自身がやらなくとも、家へ帰れば夕餉は出来ている。

二階建ての多い表店を見上げると、屋根と屋根の連なる間から覗く空は薄く夕日の色を滲ませていた。

懐かしい湯気の香りが鼻先をくすぐった。今日もまた、出来合いの惣菜を煮売屋から買うことになる。

空を仰いでいると女のささやき声が耳に触って首を巡らせた。湯屋帰りのお内儀が、頬をほんのりと上気させてこちらを見ている。

行商でもないのに表店をふらふらする年若い影虎の姿は否が応でも浮いた。だが、どうしても足は源九郎の長屋へ向かってしまう。ここへ来たからといって六花に会えるわけではないのに、気付くところにはいた。

足を止めて、二階建ての長屋を振り仰いだ。源九郎の長屋は二階建てで、二階の障子戸には手摺がついている。風を通すためか、いつも障子戸がほんの少し開いていた。

源九郎はもう戻っているはずだが、押しかけるわけにはいかなかった。ただでさえ六花の面倒を見てもらっている上に、これ以上の迷惑はかけられない。しばし夕風に吹かれながら佇んで、踵を返した。

いつ六花は目覚めるのだろうか。もしかしたら目覚めないのではないだろうかと考え始めると心が止まってしまふ。もしかしたら、とうにどこにもいないのではないだろうか。最悪の事態を考えて、ぶるりと身震いした。

秋でもないのにうすら寒さを感じて、脇腹の傷がしくしくと痛んだ。

首を振ってもう一度長屋を振り返る。と、二階の障子戸に人影が滑り込んだのを視界の隅で捉えた。

まさか。

目を見開いた影虎は駆け出していた。戸にすがりつき勢いよく開けると、かまどに立っていた二人の女のうち、気の強そうな顔をした方がきゅっと短い悲鳴を上げてお玉を取り落とした。

「ちよつと、あんた勝手に」

慌てふためく声が背中にかかった。草鞋を脱ぐのももどかしく、土間に脱ぎ捨てる。

見慣れた九尺二間の長屋よりも少しばかり広い。奥には勝手口がもう一つあり、二階へ続く階段は土間を上がってすぐだった。上へ伸びる急な階段の先を見上げた。

自分が、見間違えるはずがない。

「六花！！」

階段の先で立ちすくんでいた六花は体を強張らせた。その場から逃げ出そうと六花が身を翻すよりも、影虎が大股に駆け上がった方が早かった。

腕を取られた六花の瞳に怯えの色が混じった。

何かを言わんとして六花はひゅつと息を吸った。しかし、声を発する前に腕の中に閉じ込める。折れよとばかりに抱き締めて、白く柔らかな髪に鼻をうずめた。丁子油の懐かしい香りがして、ほうつと息を吐く。

「六花」

小さな体が身じろいだ。同時に、背中を何かで叩かれて怪訝そうに振り返ると、女が眉を吊り上げて箒を振り上げた。

「この野郎、離れな！！」 どの誰だか知らねえが、その娘さんはうちで預かってる大事な子だよ！！」 どの馬の骨ともわからん奴が触っていいようなもんじゃない」

害虫でも駆除するように女は影虎に箒を振るった。物腰の柔らかなもう一人の女が後ろから穏やかな声を上げる。

「あらあら小梅さんってば」

「奥様は下がっててください。さあとつとと出て行きな！！」

「ためえこそこの誰だ。邪魔だ」

「なんだと?! 生意気なのはこの口か、この口か?!」

やめねえか、と騒ぎを聞きつけてやってきた源九郎が一喝した。

お前さま、と呼んだのは物腰の柔らかな女だ。対して小梅と呼ばれた女は唇を尖らせてししぶ箒をおさめる。

「何かと思えば、影虎、おまえさんは行くところ行くところで騒ぎになるなあ」

「えっ、影虎って……こいつが?!」

ぎよつとした小梅の言いようが糞に障って影虎は軽くねめつける。源九郎の視線が六花を見止め、わずかに細められた。小梅がいかに失敗をしたときのような顔をして「あちゃー」と呟いたことで、

影虎は合点がいった。謀たまたられた、そう頭の隅で思ったときには源九郎の胸座を掴み上げていた。

「なんで嘘ついてた!!!」

六花はとうに目覚めていた。それを源九郎は隠していたのだ。もし、六花が今しがた目覚めて階下に降りてきたとしたら、起き上がって動いている六花を見た源九郎は何か一言でも言うはずだ。

目が覚めて良かったな、と。

「なんで黙って、いつから嘘ついてやがった!!!」

「やめて虎ちゃん。親分さんが悪いんじゃないの、わたしが言わないでって言ったから」

六花は慌てて、食ってかかった影虎と源九郎の間に割って入った。

「わたしが悪いの。親分さんはわたしの我が儘を聞いてくれただけ」

「なんで…、」

六花の今にも泣きそうな顔を見るうちに、胸座を掴んでいた手が力が抜ける。青ざめた頬に触れようと伸ばした手は、六花が身を引いたことで行き先を失って力無く垂れた。

「なんで逃げる」

どうしてそんな怯える目で見る。

源九郎に目一杯背中を押しつけた六花は気まずそうに視線を泳がせた。桃色の唇が言葉を紡ぐことを躊躇して、何度か薄く開いては閉じる。

「虎ちゃんに触るの、怖い」

思ってもみなかった言葉に、影虎は刺されたような顔をした。

六花は胸に下げた巾着を握り締めて、ようやく声を絞り出した。

「虎ちゃんの体がどんどん冷たくなっていくのが怖かった。また、あんなふうになるかもしれないと思うと、会うのが怖かった」

日向にいるよりも何よりも、一番温かい影虎が冷たくなっていくのは怖かった。それが自分のせいだと思うとより恐ろしかった。

「だって、顔を見たら、駆け寄らずにはいられないもの…!!!」

ぎゅっと硬く目を閉じた六花のまなじりから涙が溢れた。

この数日、毎日訪れる影虎の姿を隠れて見ていた。肩を落として去っていく影虎の背中を見るたびに、声を上げて、駆け寄って抱き締めたくなった。

でも、それ以上に恐怖が胸の奥に落ちた。また、ふとした拍子に妖気を残らず吸い取ってしまったらどうしよう。医者には、急激に妖気の減った体が起こした一時的な反応だろうと言われたが、にわかには信じられなかった。

源九郎は顔を覆った六花の頭に手を置いた。

「でも、俺が触っても大丈夫だろう。影虎だけ駄目なんてこたあねえんじやねえのかい。全く、あのときの影虎の取り乱しようといったら、おまえさんに見せてやりたいくらいだ」

笑みを含んだ源九郎は大きな手で優しく背中を撫でた。迷い犬のような情けない顔をした六花は源九郎を見上げ、視線を落とす。

その場から動かない六花を見て取って、影虎は踵を返す。

「けえります。騒ぎ立ててすみませんでした」

あっと短く六花は声を上げたが、影虎は振り返らずに間口をくぐってしまった。肩をすくめた源九郎に代わって、お内儀が躊躇う六花の背を押した。

「行っておあげなさいな、さあ」

「でも、」

「あんな影虎さんの顔、今まで見たことあって？ 六花さんも自分がどんな顔しているかわかっていないでしょう。大事なんでしょう？ 大事なら傍にいておあげなさい」

「お内儀さん」

「ほら、早く」

「……お世話に、なりました」

六花は唇を噛むと深々と頭を下げた。その草鞋をお使いなさいと言われ、六花は土間を覗き込む。そこには真新しい草鞋が用意してあった。六花の決心がついたときにいつでも出ていけるようになるという配慮だった。

まだ肌に硬い草鞋に足を入れ、六花はもう一度頭を下げた。間口から飛び出すと、歩幅の広い影虎の背中はずでに人波に埋もれていた。揺れる髪紐と、頭一つ飛び出ているのを目印に追いかけた。

途中で誰かの足を踏んで、すみませんと謝る。むっと込み上げてくる人いきれが息苦しい。数日外へ出ていなかっただけで、もう人の温もりを忘れてしまっていた。

(虎ちゃん…!!)

やっぱり駄目だ。傍にいたい、傍にいてほしい。一度は距離を取ろうかとも、離れようかとも考えた。でもやっぱり駄目だ。

そう簡単に、あの温もりを手放せない。

「虎ちゃん!!」

表通りを過ぎ、柳の揺れる河岸で六花は声を張り上げた。

影虎は弾かれたように振り返る。六花の姿を見止め、その場に佇む。六花はしばし肩で息をしながら、暮れる夕日に照らされた影虎の姿を見つめた。

影虎の歩幅は広く、一步は六花の三步分だ。追いつくには骨が折れた。息をするたびに肺が焼け付いた。

「虎ちゃん」

一步踏み出す。続いて一步、もう一步と踏み出せば、四歩目は駆け足に変わっていた。

手を伸ばすと、影虎は腕を広げて飛び込んできた六花の体を受け止めた。きつく抱き締められ、お日様の匂いと、いつか作ってやった匂い袋の香りが六花を包み込んだ。

懐かしい匂いに包まれて、ひくつと嗚咽が喉から飛び出た。

「とら、虎ちゃん…!! 虎ちゃん、ごめんなさい、ごめんね…!!」

すがりついてくる六花を抱き締めた影虎は、その柔らかな髪に頬を寄せ「馬鹿野郎」と優しい声音で言った。

影虎の腕の中は、いつもと同じで何よりも温かかった。

さやけし玉の緒（10）

六花は握り飯を包んだ風呂敷を胸に抱いて河縁の通りを歩いていた。樽を積んだ茶船がゆるゆると下っていくと、川面が波立ち、反射した光が魚の鱗のようだった。

朝日が目に染みて、眩しそうに目を細める。

やがて南町奉行所が見えてきて、広い間口からひよいと跳び込んだ。

「おはようございます!」

元氣よく挨拶するなり、顔を上げた影虎へ駆け寄って首っ玉に抱きついた。

「虎ちゃんお早う!!」

「苦しい離れる」

頭突きを受けた六花はきやんと子犬のような声を上げた。額をさすって包みを影虎へ手渡した。

「はい、いつものだよ」

「ん」

受け取った端から包みを開き始めた影虎の横で、安堵の表情を浮かべた白碩が微笑んだ。

「お早う、りっちゃん。体の具合はどう?」

数日ぶりに顔を合わせた白碩の前に、六花は居心地悪そうに身じろいだ。鳩尾を穿たれた傷は、影虎が妖気を注いでくれたおかげか痛みもなく、傷口も残らず完治した。

眠っていた日数は影虎よりもよほど少ない。とっくに目は覚めていたのだが、源九郎に内緒にもらっていたので、なんとなく裏切ったような、後ろめたい気がした。

「うん、もう大丈夫。心配した…?」

「そりゃもちろん。起きられるようになって良かったね。道理で今日は影虎の機嫌がいいわけだ」

握り飯を口いっぱい頬張った影虎は、いまいち迫力の欠ける姿でねめつけた。白碩は我関せずといった様子で六花の手を取る。

「影虎が一番心配してたよ。僕が言うのもなんだけど、りっちゃんがないあいだね、ぼーっとしちやってそれは大変だったんだよ。りっちゃんがなくなつたときの取り乱しぶりったら、見せたかったなあ。いやほんとあれは見物だった」

「そこうるせえぞ」

苛立たしげな舌打ちが飛んでくる。そっぽを向いた影虎を見やると、その向こうでじつとこちらを見ている赤毛の男が目に入った。常駐している与力と同心はもちろん、出入りしている手下の顔はだいたい覚えているが、初めて見る顔だった。

六花が小首をかしげると、男ははっと我に返つたように立ち上がった。

「見かけない人がいる」

不思議そうな様子の六花に、白碩は合点がいったように多聞を振り返る。

「ああ、そうそう。新しい仲間。そうか、りっちゃんは初めてか。

多聞、この子が…」

白碩が挨拶を促す前に多聞はいそいそと近寄ってきた。六花の前に立つと、顔を上気させた多聞はさりげなくその手を取った。熱っぽい瞳が真っ直ぐに六花を見つめていることから、誰がどう見ても一瞬で惚れたとわかった。

積極的な様子に白碩はまたたくと、視線をそのままに影虎を肘でつつき、囁いた。

「仲間にするのは反対だって言った方が良かったんじゃないの」

影虎は無言で最後の握り飯に食いついた。その隣で多聞は六花の手をぎゅっと握り締める。

「り、六花さんの話は聞いてます。目が覚めて何よりです。俺、今度ここに世話になることになりました。多聞っていいいます、よろしくお願いしますー!」

きよとんとした六花は首をかたむけた。柔らかな髪が頭の動きに合わせて揺れた。

「初めまして、六花です。…ええと、多聞ちゃんなので、もん聞ちゃんって呼んでいいですか」

「喜んで！ あ、俺も六花ちゃんと呼んでいいですか？！ あ、あと、敬語はやめてくれると嬉しいかな」

頷いた六花は小躍りする多聞を見つめた。年の頃は六花より少しばかり上だろうか。着物に包まれた体は細身に見えるが、獣のようなしなやかさがある。どこことなく野性味を感じるのは、向かって左の眉尻に傷があるせいかもしれない。

触れている手から感じられる妖気がとても湧きたっていて、元氣な人だなあと思った。

そんなふうに使われていることなど露知らず、多聞は人好きのする笑みを浮かべた。

「六花ちゃん、時間のあるときにこの街を案内してくんないかな。俺、ここには来たばかりでまだ良く知らない……」

「その手え離しな」

握り飯を平らげて最後に指を舐めた影虎は、立ち上がると多聞の顔面を鷲掴みにした。力を入れると多聞はぎゃつと悲鳴を上げて六花の手を離れた。涙目で影虎をねめつけたことで、相当に痛かったのだと知れる。

「何すんだよ！！」

「ちよいと失礼するぜ」

影虎に食ってかかった声は、奉行所の穏やかさにそぐわない低い声によって遮られた。間口には背の高い隻眼の男が立っている。黒い眼帯の下からは刀傷と思われる古傷が覗いていた。

渋面の男に見覚えがあり、源九郎は煙管を置くと立ち上がった。

「どうしたい。おまえさんが来るなんて珍しいな」

「どうも」

隻眼の男はちらりとも相好を崩さない。触れれば切れそうな刃の

ような雰囲気の男は、罪人を入れておく牢屋敷の頭だ。

「あんたらに聞きたいことがあつてきた。先日の行者を捕らえた奴はどいつだ」

「俺だ」

影虎が進み出ると、男は懐から人相書を取り出した。四つ折りに畳んであつたそれを広げると折り皺を伸ばしてみせた。

「この顔に見覚えは」

墨で書かれていたのは、頬のこけたやつれた顔つきの男だった。もつと健康的であつたなら優男とでも言えそうな面影があつた。

見覚えのない顔に影虎は眉をひそめる。が、六花がその後ろであつと声を上げた。その場に居合わせた全員の視線が六花に集中する。痛いほど真剣な眼差しを受けて六花は口ごもつた。

「お嬢さん、どこで見たね」

「西の隅にある、長屋に住んでいた旦那さんです」

「知り合いか」

西の長屋と聞いて隻眼の男の声は陰を含んだ。知り合いかという問いにすぐに答えられずにいると、影虎が代わりに口を開いた。

「こいつは他人から吸い取つた妖気を循環させて病を癒す。頼まれてそれをやつてただけだ」

六花の噂は聞き及んでいたのか、男はさして驚いた様子も見せず指で顎を撫でた。何事かを思索している様子に痺れを切らし、影虎は苛立たしげに聞いた。

「そいつがどうしたつてんだ」

「いや、まあなんだ。結論から言うと、今、牢に入っているのは行者じゃねえ。この男だ」

いぶかしげな顔をしたのは影虎だけではなかった。隻眼の男は言葉を選ぶのに躊躇つて、後ろ顎に手をやった。

「俺にもよくわからねえんだが……」

行者は大番屋で取り調べを終えて、牢屋敷に運び込まれた。行者は自ら立って歩くものの、大人しく、口もきかず、日がな一日ぼん

やりと牢の中で過ごしていた。静かさは気味の悪いほどで、声をかけても返事もしない。肩を落とし、虚ろな視線を天井に向けていた。その日、改めるために牢を開けた者が、返事をしない行者にいつい手を出してしまった。すると体はぐらりと傾き、人形のように倒れ込んでしまった。

「とつくに死んでたようだけ。だがどうだ、奇妙なのはそれじゃねえ」

脈を測ろうと仰向けにすると、今の今まで袈裟に身を包んでいたのは頭を剃りあげた若い青年だったのに、いつの間にか少しばかり年のいったやつれた男に変わっていた。

隻眼の男は人相書を指で音がするほど弾いた。

「それがこの男だ」

嘘だ、と多聞は震える声を上げた。

「だって、確かに大番屋に入ったのを見た！！ そうだろう?!」

青白い顔をした多聞は源九郎と白碩を交互に見やった。確かに、影虎の符術に拘束された宗玄が大番屋に入った姿を見ている。

それこそ引き渡しするときも獄門道の術で拘束されているので、相
当な手練でも縄抜けは難しい。

「傀儡、か…?」

言葉を失った三人の中に、ぼつりと影虎の声が落ちた。源九郎は
厳しい顔つきで腕を組んだ。

「できそうな奴さんだったか」

「まあ、行者の癖に妙に場馴れしてるとこはあったな。術に精通して
る奴だったら、傀儡ぐらい簡単にやってのけるだろうよ。あすこ
にあった仏さんは一体だけだった。六花、そこに住んでたのは仏さ
んと、その旦那だけか?」

六花は小さく頷いた。影虎は口の端に何か引つ掛かったような
笑みを浮かべた。

「まんまとやられたな。行者本人じゃねえ、傀儡と戦ってたってわ
けか。……道理で、そうか、奴一人だけびんびんしてたわけだ」

あの場で六花から離れた場所にいた多聞でさえ、妖気を吸い取られて昏倒していた。しかし、宗玄は一人だけ妖気を吸い取られた様子もなく動き回っていた。

死体に妖気は残らない。何らかの方法で事切れた男を宗玄そっくりに仕立て上げ、操っていたのだとすれば合点がいく。

影虎は舌打ちをした。

「ともかく、そいつのツラを改めに行く。多聞、てめえもこい。一番わかってんのはてめえだからな」

すぐには動けない多聞の首根っこを引っ掴む。

「虎ちゃん」

不安げな声を上げた六花に「すぐに戻る」と言い置いた。しかし、六花は首を横に振る。

「虎ちゃん、わたしも行く。わたしも顔知ってるもの」

「やめとけ」

追いかけてきた六花の肩を押し戻したが、隻眼の男が影虎の手を制した。

「知ってる奴は多い方がいい」

斜に見やった影虎は、好きにしると吐き捨てた。さっと身を翻して大股に先を行ってしまふ影虎を六花は小走りに追いかける。

「やってくれるじゃねえか」

舌打ちと共に口の中で呟いた声を拾い、六花は硬い横顔を見上げた。

街の大通りは変わりなく賑々しい。棒手振りが桶を天秤棒に吊るして跳ねるように駆けている。その横を、荷を積んだ大八車が通り、ぱっと砂埃が舞い上がった。

六花は足早に後を追いかけながら、首から下げた巾着を握り締めた。体内から取り出された狐玉を失くさぬようと源九郎のお内儀が作ってくれたものだ。色を付けたビードロのような薄桃色の玉は、握るとほんのり温かい。

自分がとうに滅んだはずの白狐だったなんて、今でも信じられな

かった。けれど、体の中に確かに玉を持っていたのが動かぬ証拠だった。

玉は温かく、月の光のような柔らかな微光を発している。六花の鼓動に合わせて明滅を繰り返すことから、紛れもなく体の一部分のだと知れた。

いつかまた、これを巡って平穏がかき乱されるときが来るのだろうか。

六花は身震いして肩越しに振り返った。誰も追いかけてきていないのに、何かに追いついて立てられているような不安を拭いきれなかった。

さやけし玉の緒（10）（後書き）

続く…か？

あ、曖昧すぎるー。

読んでいただきありがとうございます。おかげさまで無事に一区切りつきました。

ここで完結にしてしまうのは（ヴァンパイア・キスという前例もありますし）許されなかるうということと、とりあえず続く予定です。藤藤のアタマ次第。

しかしこれ、ツンデレっていましたか？

藤藤の中ではツンデレに入ると思われるのですが、ちょっといまいち物足りない気もしないでもなく…。

この後はアンナコトやソンナコト（どんなこと）もいろいろさせたので、頑張って考えていこうと思っております。気長にお待ちいただけるとありがたいです。

では、またお会いできることを祈って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0307v/>

妖都捕物帳

2011年9月29日03時22分発行